

湯島詣
泉鏡花作

目次

紅茶會
三兩二分
通ふ神
紀の國屋
段階子
手鞠の友
湯歸り
描ける幻
朝參詣
言語道斷
下かた
狂犬源兵衛
半札の圓輔
犬張子
胸騷
鶯

白木の箱
灰神樂
星

紅茶會

一

「紅茶の御馳走だ、君、寄宿舎の中だから何にも
ない、砂糖は各々適宜に入れることにしよう。さあ、
神月。」

三人の紅茶を一個々々硝子盃に煎じ出した時、柳
澤時一郎は其のすつきりと背の高い、緊った制服の
姿を藤の椅子の大きなのに、無造作に落していった。

渠は腕袋の美しい片脰を椅子の縁に掛けて、悠然とぶら下げながら、

「篠塚、其の砂糖をお客様に出して上げる。」

「おい、」と心安げに答へたのは和尚天窓で、背廣を着た柔和な仁體、篠塚某といふ哲學家。一脚の卓子を圍んで柳澤と差向ひに同じ椅子に掛けて居たが、體を捻つて、背後へ手を伸すと雑書を納れた本箱の上から、一瓶の角砂糖を取つて、之を二人の間に居る一人の美少年の前に置いた。

「取つて頂くよ。」と優しく會釋する、之が神月と呼ばれた客で、名を梓といふ同窓の文學士、いづれも歴々の人物である。

梓は柳澤が煎じてくれた紅茶の、薄紅色の透取る硝子盃の小さいのを取つて前に引いたが、いま一人哲學者と肩を並べて、手織の綿入に小倉の袴、紬の羽織を脱いだのを、紐長く椅子の背後に、裏を翻して引懸けて片手を袴に入れて、肅然として讀書する薄髯のあるのを見て、

「何を讀んでるんです、」と少しく腰を浮かして、差覗いて聞いた。

「僕と、」應じはしたけれども、急に顔を上げたので誰に返事をするのであるか、自分にも分らないで迂路々々するのを柳澤は氣輕に引取つて、

「若狭が讀んでるのは歴史だよ、國史專修の先生だもの、須臾の間も研究を怠らない。」

「御勉強です、」といつて神月が黙首くと、和尚は、にや／＼と笑ひながら、其の讀んでる書を横目で見た。柳澤は吹出して、

「眞面目な挨拶をする奴があるものか、歴史は歴史だが大變なもんです。無名氏著、岩見武勇傳だから可いぢやあないか。」

「酷く研究をして居ります、」と哲學者は仰いで飲む。之が聞えたものらしい。若狭は讀みながら莞爾とした。

「又何その材料にならないとも限らないだらう。」

と梓は其の硝子盃を手にした。

柳澤は斜に卓子に凭れて、小刀の柄で紅茶に和した角砂糖を突きながら、

「そりやある、其の材料のあることは丁度何だ、篠塚が小まさの浄瑠璃の中から哲理を発見するやうなもんだ。」

「馬鹿をいへ。」

梓は傍より、
「然し君も鳥屋の女の言は、時に詩調を帯びると、然ういつた事があるよ。」

底意なき人達は三人一堂に笑つた。

「賑かだね、柳澤、」と窓の下の園生から聲を懸けたものがある。

一番窓に近い柳澤は、亂暴に胸を反して振向いたが、硝子越に下を覗いて見て、

「龍田か。」

「誰か来て居るかい。」

「根岸の新華族だ、入れ。」と云つて座に直る。

同時に、ひよいと窓の縁に手が懸つた、飛附いて、其以前、器械體操で馴らしたか、身の軽さ、肩を揺り上げて室の中に、先づ其の瀟洒なる顔を出したの
は、龍田、名を若吉といふのである。

梓を見て笑を含み、

「堪忍してやれ、神月はもう子爵ぢやあない。」

といひながら腕組をして外壁に附着いたまゝで居る。柳澤は椅子をずらして、

「まあ入れ、丁度可い。今其事に就いて、神月問題といふのははじめた處だ。一寸其休憩時間よ。神月が酷く辯論に窮して、き様の來るのを待つて居た

んだぜ、龍田が居たらばツて然ういつてな。」

聞きも果てず、満面に活氣を帯び來つた龍田は、
翻然と躍込み、二人の間へ衝と立つて、卓子に手を
支いたが、解け懸る毛絲の襟卷の端を背後へ撥ねて、

「可し、又例の筆法で苦しめたか、神月君、」

親しげに、

「よく、僕を待つてゝくれました、もう大丈夫だ、
心配を爲たまふな。僕何のために學生となつて、法
律を研究してると思ふ、皆親友神月の辯護をするた
めだね、何うです。」

「何うぞ宜しく、」
「といつて梓は戯れに頭を下
げた。」

龍田は其の薩摩飛白の羽織の胸紐をぐツとメめ、

「さあ、來い。」

「又やんちゃんが始まるな、」
と哲學者は兩手

で頤を支へて、柔和な顔を仰向けながら、若吉を瞞めて剃立の髯の痕を撫で廻す。

「大概分つてるさ、問題といふのは神月が子爵家を去つて、彼の夫人に別れて、谷中の寺に籠城して、そして情婦の處へ通ふのを攻撃するんだらう。」

「勿論、」と簡單。ぐわちやりと雑具の中へ小刀を投出して、柳澤は大跨に開き直り、

「最初、神月が其の夫人との中に感情を害したのは、不幸にも結婚の第一日、即ち式を挙げた日だ。」

「然やう、」と突込んで應ずる龍田の聲は明快である。

「き様も知つてるな、僕も聞いた。而して成程と思つたが、考へて見ると蓋し神月の方が非なんぢやあないか。」

「何、那樣ことがあるものか、新婚旅行に出掛け

ようとして、上野から汽車に乗込むと、未だ赤羽根の聲も掛らぬうち、山下の森の中で、光りものがあった。神月は「ー おや、人魂が飛ぶ、ー」と何心なくいつたんだ。谷中は近し、こりや感情だね。然うすると、彼の嘖め。」

「龍田窘め、旦那様の前ぢや、」と哲學者が戯れる。

顧みて、

「失敬。」

「結構、」といったのは、其の所謂旦那様梓で

あつた。龍田は勢よく、

「何うだ、小生意氣ではないか、ーいゝえ、

星が流れたんです、隕石でございます、ーと

云つた、其ればかりならば未だしも恕すね。」

「神月が人魂だといつたのを聞いた時、那奴愛嬌のない、鼻の隆い、目の強い、源氏物語の精靈のやうな、玉司子爵夫人龍子、語を換へて言へば神月の鼻だ。君、其奴がね其の權式高な、寂しい顔に冷かな笑を帯びてさ、文學士を輕蔑したもんだぜ、神月なるもの癩に障らざるを得んぢやあないか。」

「可し、婿さんは癩に障つたらう。癩に障つたらうが、又夫人其人の身になつて、其時には限らぬが、凡て神月の性質と、行を見た時の夫人の失望を察せんけりや不可。尤も餘り物質的の名譽を重んずる夫人の性質も極端だが、其だけに又儕輩に群を抜いて、上流の貴婦人に、師の如く、姉の如く、敬ひ尊ばれて居る名譽を思へ、七歳の年紀から佛蘭西へ行つて先方の學校で育つたんだ。」

「待て、待て、少し待て。」と龍田は掌で卓子を押へ、語を遮り

「まあ待て、先方が七歳の時から佛蘭西で育つた

んなら、手前どものは六歳の年紀から仲之町で育つ
たんです、尤も唯今は數寄屋町に居りますがね。」

「龍田、」と留めた、梓は恥づる色があつた。

「可いよ、君、可いから言はして置け、何うせ皆
御存じなんだ。何うです、彼が佛蘭西で、學び、日
本で得た、凡ての學識と、其の子爵たる財産と、家
屋と、庭園と、十幾人の奴隸とだ。其の言一句と雖
も忽にせず、一舉手一投足と雖も謹んで、二十七歳
の今日まで、旭の昇るが如くに博し得た名譽とを、
悉皆神月に捧げて、其の妻となつたのを、恩だとい
ふんなら、此方にだつて其の一切に價するものがあ
るんだよ。」

哲學者は言を挟み、

「見給へ、又龍田が例の笛と鼓を持出すからな、
はゝゝゝはゝ。」

「何を失敬な、」と哲學者を一寸睨んで、
「然うさ、持出すが悪いか。先方ぢやあ巴里で、

麵麩を食つてバイブルを讀んで居た時に、此方ぢやあ、雪の朝、顫へてるのを戸外へ突出されて、横笛の稽古をさせられたんだ。吹込む呼吸が強くなるためだといつて抱主が、君、朝御飯も食べさせない、耐るもんか、寒い處を、笛を習つてる中に呼吸が續かぬから氣絶するのが、毎朝のやうだ、水を吹かけて生返らして、それから握飯の針のやうなのを二ツづゝ貰つて食べる、歸ると三味線のお温習をして、其のまゝ下方の稽古に遣られる。直ぐに踊の師匠に打ちのめされるんだ。生疵の絶間もない位、夜はといふと座敷を廻り歩いちゃあ、年上の奴に突飛ばされて、仰向けに倒れると見つともないといつて頬板を打たれたもんだ、何の爲だ、同じ我々同胞の中へ生れて来て、一方は髯を生して馬車に乗つた奴に尊敬される、一方は客とさへいやあ馬の骨にまで、其の笛を以て、其の踊を以て、勤めるんです、此間に處して板挟となつた、神月たるもの、宜しく彼を棄てゝこれを救ふべしぢやないか。何うだね、殊に親も兄弟も叔父叔母もない。唯手足と、顔と、綾羅錦繡と、三味線と冷酒と踊とのみあつて存する、あはれな孤兒を何うするんです、ねえ君、其處は男子の

意地だ。と若い人は意氣頗る昂つた。

柳澤は冷然として、

「あらず、然云ふ意地は、鳶の者も持つてるぢや

あないか。」

四

此折このをりから譬たとへば荒瀧あらたきを寸々すた／＼に切きつて落おとすやうな、
がツノ、といふ響ひびきがした。此音このおとは校舎かうしゃの奥おくの方かたより
遙はるかに轟とどろき來きたつて、床下ゆかしたを決けつして戸外おもてへ抜ぬけたのであ
る。

先刻さつきから故わざと笑顔ゑがほを装よそはひながら、何か澄すまないら
しい色いろが見みえて、殆ほとんど茫然ほんやりしたかの如ごとく、柳澤やなぎさはと龍たつ
田たの論ろんずる處ところを聴きいて居ゐた文畢士ぶんがくしは、太いくくこれを感じかん
じた様子やうすで、

「何なんだね、今いまの音おとは、」と安やすからぬ状さまして尋たづね
た。

柳澤やなぎさは、其そのあらぬ方かたを瞞みつめて居ゐて落着おちつかない梓あつさの
面おもてを瞻みまもつて、

「忘わすれたか、神月かづつき。」

「何なにを。」

「今いまの音おとを。室しつを煖あためる蒸氣じやうきぢやあないか。」

言いふ時とき、煉瓦造れんぐわづくりの高たかい寄宿舍きしゆくしやの二階かいから一文字いちもんじに

懸けてある鐵の樋が嶋つて、深い溝を一團の湯氣が
白々と渦き上つた。硝子窓は朦朧として、夕暮の寒
さが身に染みるほど室の煖まるのが感じらるゝ。

柳澤は片手を握つて、長く之を神月に差向けて卓
子の上に置き、

「それだから既う寄宿舎に居た頃の事を君は忘れ
て了つたのだ。既に幾度も君が學資に窮して、休學
の已むを得ざらむとする毎に、常に佛文の手紙が添
て、行届いた仕送があつたではないか。神月、君が
俊才有爲の士である事は皆が認めて居た、けれども、
いざとなつて金貨を積んで其の業を助けたものは、
天下に今の夫人を措いて他にやなからう。

さうすりや恩人で又唯一の知己といはなければな
らない。夫人の名譽のため、幸福のため、子爵のた
めといふよりも、唯其の知己であるといふばかりに
對しても、君の行は些と間違つて居るぢやあないか。

梓は聞いて物をもいはず差俯向いたにも係らない
で、龍田は凜として姿を調へ、

「柳澤、那樣ことをいつて僕の居ない時に梓君を苛めるのか、止せ。可いよ、待て、まあ、僕のいふことを、今君のいふ如くんばだ。鼻殿は佛文の手紙と、若干金の學資とを以て神月を買つたものだと言はなけりやなりません、其奴あ御免を蒙り度いな、仕送をしたつていくらがもんです。金子なら千か二千ぢやあないか。利をつけて返すくらゐ然ほど困難なことでもなし、又其位な價で婿に買占められるやうな、僕の梓君ぢやあない。其を兎も角も言に應じて玉司家を嗣いだのは、即ち君のいふ、其の知遇に感じたからだ。

然るに、のつけから人魂と流星の事で早くも神月の感情を害ねたのは何う云ふ譯だい。

總て女學校の教科書が貴婦人に化けたやうな譯で、まづ情話を聞かされると頭痛がして來るといやあ、生理上然云ふことのあらう筈はない、と云つた調子だから耐つた譯のもんぢやあない。

鯉は中落が旨くツて、比良目は縁側に限るといや

あ、何なんですか、其處そこに一番ばん滋養分じやうぶんがありますか、と仰おつしや有るだらう。衛生ゑいせい盡づくめだから耐たまらない。やれ教育けういくだ、それ睡眠時間すいみんじかんだ、もう一分ぶんで午砲どんだ、お晝飯ひるだ。お飯まんまだ。亭主ていしゆが流行感はやりかぜ冒ぜ一つ引ひいても、最先まつさきに傳染でんせん性せいなりや否いなやを醫師いしに質たゞすやうな婦をんなを、貴婦人きふじんだつて、學者がくしやだつて、美人びじんだつて、年増としまだつて、女房にようぼうにして居ゐらるゝもんか。」

「考へて見給へな、名譽だの、品性だの、上流の婦人の龜鑑だのと、體の可い名は附けるものゝ、何がなし見得坊なんぢやあないか。」

御覽なさい、だから神月と結婚をした當座に、はじめからの關係を知つてる新聞が報道をすると、其の記事の中に、何か夫人が豫て神月に戀をして居たといふやうな意味が書いてあつたといつて、嗚々め恐しく憤つて、名譽を蹂躪された、世の中へ顔出しも出来ないでツたやうなことを言つて、恰も神月君が社をして書かしたやうに當り散らしたといふんだ。夫に愛しとると言ふことを以て、大なる恥辱と心得るやうな見得坊が又あるかい、怪しからんぢやあないか。」と聲を鋭くしていふ、龍田は其の白面に紅を漲らしたのである。

これを聞いて聞き惚れて、
「しつかりやれ／＼。」と哲學者も嬉しさうに
應援した。

「そののみならず、數寄屋町と神月君とは神の引合せだと云つても可いな。」

第一それからして夫人と衝突する基ぢやあつたらうけれども、神月は先天的、寧ろ家庭的か、然うだ、家庭的信心者で、寄宿舎に居る時分から、湯島の天神へ參詣をするのが例で、子爵家に行つてからも毎月缺かさなかつた。去年の夏だ、まだ朝早いのに湯島に參つて、これから鰐口を鳴らさうと思ふので、御手洗で清めようとすると、番の小兒が水錢をくれると云つた。懷を探すと神月が懷中物を忘れたね、後に届けるといつても小兒だから譯が分らぬ。内氣な殿様だから顔を赧くしてまごゝしたツさ。其處へ來合せて水錢を達引いて、其が御縁となりましたのが、唯今の美人です。蝶さんなんだ。」

「解りましたよ。」といつて柳澤は詮方なげに苦笑した。

神月は極惡げに、

「もう可いぢやないか、皆僕が悪いんだから、ま

あ、柳澤、龍田。」

「いゝえ悪くないよ。僕は**大賛成**、一體婦人が男子に對して**貢獻**するのに、自分の**名譽**だの、**財産**だの、**藝術**だのを以てして、其で、**算盤玉**に當つて、**差引**かうと云ふほど**生意氣**なことは無い、況や、其に**恩**を被せるに到つては、**不屈**といはざるを得ないな。

然るに蝶さんに至つては、其の**今**まで爲し來つた**總**ての、可いかい。平ツたくこれをいへば**苦勞**だ。其の**苦勞**は殆ど**天下**に**大名**をなしたものの、**堅忍**苦耐した位なもんだよ、其の**閱歴**に對する**報酬**として、**唯**、ひたすら、**簡單**に**神月**に見捨てられまいといふことを願つて又**他意**なきを如何よ。其上に**一意**專念、**神月**の爲に**形造**るに到つては、**男子**須くこれがため**名**と**體**とを與ふべし、**下**らない**名譽**だの、**財産**だの、**徳義**だのに、**毛一筋**も拂ふもんか。」

「然し**龍田**、**アダム**と**イヴ**あつて**以來**、**世界**に**男女**唯二人ばかりではない。譬へば、**神月**と其の**美人**と、」

「勿論、僕も居る、」

「それから俺よ、」

「私も居るわい。」と哲學者は前に屈んで、顔

を差向けていった。

「加ふるに君が居ても差支へない。諸君のやうな
人ばかりなら、幾人居たつて私は心配も何もしない
が。」と梓は愁然として差俯向く。

「だから神月、君自ら感情を制して、其の美人と別れたら可からう、」と柳澤は慎重に諭した。

「何、もう子爵家を去つて、寺に下宿したら可いぢやあないか。僕はね、爵位と、君があの高慢な鼻々とを棄てたといふので、總ての罪を償うて餘あるもんだと思ふ。借金でも何でも遣つゝけツ了へ。癩に障つたら片端から彈飛せ。一般の風潮で、日本に容れられなかつたら、二人で海外に旅行するさ。それでも可けなけりや、天に登ることだ。美しい星が二つ出来るんです。天文學者には分らなくツても、情を解するものには、紫か、緑か、燦然として衆星の中に異彩を放つのが明かに見出される。」といひ放つて、龍田は其の若々しい、美しい顔を仰向けて、腕組をした、毛絲の茶色の襟巻は端がほろ／＼と解けた。

其の背を叩いて、

「江戸ッ兒！」

相變らず暢氣なものだな、本人の

神月は、君より餘程譯が分つてるよ。だから心配をするんぢやあないか。」と穩に云ひながら柳澤は老實々々しく、卓子の上に兩方からつないで下げた電燈の火屋の結目を解いたが、堆い書籍を片手で掻退けると、水指を取つて、ひらりと其の脊の高い體で、靴のまゝ卓子の上に乗つて銅像の如く突立つた。天井はそれよりも遙に高いが、室は狭く、五人を入れて、卓子を真中に、本箱を四壁に塞いだ上に、戸の入口には下駄箱が並んで、これに、穿物が脱いであるなり、衣服は掛けてあり、外套は下つてる。避て通らなければ出られないので、學士は其の卓子越の間道を選んだので、餘り臨機な働であつたから、其の心を解せず、三人は驚いて四方を圍んで、齊しく高く仰ぎ見た。爲に國史專修の學士も、暫く岩見重太郎に別れなければならず餘儀なくされた。

柳澤は突立つたまゝ、

「おい、一寸退かないか。」

「何を、何を、」と哲學者は呆れ顔をして殆問題
を研究する時のやうに難しく眉を顰めた。

事も無げに、

「紅茶を入替へよう、湯を取りに行くんだから、」

「此方へ寄越せ、僕が行かう、」と哲學者も衝
と立上る。

「然うか。」といひさま、柳澤はひらりと下り
て、身軽に立直つた、ばたりと靴の音。

電燈の球は卓子の上を這つたまゝ、朱を灌いだや
うに颯と赫くなつて、ふツと消えたが、白く明くな
つたと思ふと、蒼い光を放つ！

「星を仰ぐこと、正に、」と龍田若吉は腰を落
して頭を卓子の下に入れ、顔を上げて、清しい目を
みつて、

「恁云ふ風。」

梓は其の面羞氣な顔を照らされるのを厭ふが如く、
椅子を放れて疾く背後に退いた。柳澤は長い足を素
直に伸ばして、膝を膝に乗せて組違へると同時に仰
む向けに寢て一杯に肱を張つて、両手で項を抱きなが

ら、ぢつと件の電燈を贖めた。

其時、国史専修の學士は、靜に絲を取つて、無心に繋合せて、灯を宙に釣したと思ふと、袴の下へ手を入れて、片手で赤本をおさへて見たが、其のまゝ腰を掛けて、又讀みはじめ、岩見重太郎武勇傳。

「歌んだ、歌んだ、可い鹽梅だ。」

空を仰いで立停つたのは、町屋風の壮佼で、雨の歌んだのを見ると、蠱んで袂の下に抱へ込んで居た羽織を一搖、はらりと襟を扱いて手を通した。此男が雨に當てまいと大切がるのは、單に此の羽織ばかりではなく、一品懐に入れて居るものがある。大きな紙入ではない。乳貰の嬰兒でもない。即ち一足表打の駒下駄であるが、尾上の使に駈出して來た譯ではない。之は然る筋の藝妓から年玉に買つて頂いたので、總、お守扱ひにして居るから、途中で雨を啖つたゝめに、汚すまいと懐中した。本人は生白い跣足である。

恚る人は、下町に先づ松の鮓の悴源次郎を措いて外にはない。

それ世に、鳶の者の半纏は袂にして旦那の紋着は高等である。然るに源ちゃんは兩天秤、女を張る時は半纏で、顛巻。宗匠を張る時は紋着で卷莩、色と點取發句が一齊に出来るのであるから、つい恚う下駄を懐に入れるやうな事にもなる。

却て説く源ちゃんは町中の暗がり羽織を着込んだが、足が汚れて居たから下駄は穿かないで、其のまゝ懐を揺り固めた。

「可い鹽梅だ、畜生」と、これも何か兩面に意味の通ずるやうな獨言をして、又足早に歩き出した。

其の面形の如き凹んだ面の、眉毛の薄い、低い鼻に世の中を何と睨んだ、一寸度のかゝつた目金を懸けて居る名代の顔が、辻を曲つて、三軒目の焼芋屋の灯に照された時、背後から、錆びたづんぐりした聲で、

「源ぢやあねえか、おい、源坊。」
「誰だい、」と思入のある身振で、源次郎は振り

返る。

「俺だ。」

「や、」

「待ちねえ。」

つかノと近いた、三尺帯を尻下りに結んで、兩提の蓑入をぶらりと、坊主天窓の親仁が一名。

「頭。」

「おい、」と重く落着いて一ツ頷いた。これは下谷西黒門町に住んで、頭、頭と立てらるゝ、辰何とか言ふのであらう。本名は誰も知らない、何をし暮すのか、唯遊んで、何處とも謂はず一群々入り込む狭な壯俊に、時々木遣を教へて居る。

頭は膨らんだ源の其の懐をじろりと見て、

「何だ、それは、」

「えゝ、」

「下駄ぢやあねえか、下駄ぢやあねえか、串戯ぢ

やあねえ、何を面談つたか知らねえが、其奴を懐に入
れるだけの隙が有りや、敵の向脛をかツぱらつて
遁げるゆとりはありさうなもんだぜ。何だい、出會
したなあ、犬か、人間か。」

「喧嘩ぢやあないんです。」

「辻斬か。」

「冗談をいつちやあ可けません。」

頭は故とらしく呵々と笑つて、

「ぢやあ、何うしたんだ。」といつたが、思ふ

處あるらしく、房りした其の眉を顰めた。

源次は何の氣も付かない様子で、

「仔細はないんです、喧嘩なんて何も決して那樣譯ぢやあないんだけれどね、」

「ふむ、」と心ある頭は返事まで物々しい。些と應答を仰山にされたので、源次は急に極が悪さう。

「降つて来たもんですから、其の何なんですよ、泥でも芻上げちやあ、其ね、」と今更のやうに懐を二して、

「へへへ、何詰んねえ事なんで、」

「其が、」と其時、頭はずつと合點んだ顔をして、

「あれだな、評判の。つい未だ掛違ひまして手前お目通は仕らねえが、源坊が下駄と來ちやあ當時名高えもんだ。む、名高えもんだよ。」

「何詰らない。」

「馬鹿あ言へ。豊算より目の子算用を先に覚えよ
うといふ今時の藝妓に、若干か自腹を切らせたなあ、
大したもんだ、どれ一寸見せねえ、よ、一寸拝ませ
ねえかよ。」

「思はず上から手で押へて、」

「頭、これですか。」

「其の藝妓の達引いた奴よ。」

「へ、何、下らないことを、」と内々恐悦で、
少し含羞む。

「可いやな、見せねえ、見せねえ、一番御燈明を
奉ることに爲ようぜ、待ちねえよ。」

と言ひ懸けて向直り、左側の焼芋屋の店へ、正面
を切つて揺いで入る。此の店は古いもので、取つき
の行燈に、――おいしくば買ひに来て見よ川越
の、と假名書して、本場 焼俵藤助 ――となむ。

「父爺さんや、」で頭は無造作に言を懸ける。

ぶつ／＼、ものを讀んで居た聲が礎と

止んで、破行燈の灯の射す土間の上の一枚の古障子を明けて、

「誰だい。」といった藤兵衛は、匍匐になつて、胸の下に京傳の讀本が一冊、悠悠と眞鍮環の目金を取つて、讀み懸けた本の上に置きながら、頬杖を突いたまゝで、皺面をぬつ！

「俺だよ、へむ些とも珍しくねえ。」

「おゝ、頭。」

「用ぢやあねえんだ。とつさん少しばかり店を貸してくんねえ、灯が欲しいでの。」

「何か、灯ツて、其の燻ぶり返つた釣洋燈のことかい。」

「然うよ。まあ、」

「御念にやあ及ばねえこつた、内證の文でも讀むか、」

「いんや、質札だ、構はつしやるな。寒いから閉めてくんな。」

戸外に向つて、

「源坊、此方へ入らつし。おい、何を茫然石地藏を抱いた風で突立つてるんだ、いぢけるない。」

「頭、暖んなさい、」と竈の後から皺唄れた聲を懸ける。

「おゝ、入れ黒子のしなびたの、此節あ甚麼寸法、否、寸伯か寸伯か、はゝゝ。」

「串戯ぢやあない、丁度一くいべ燻べた處だ、暖けえよ。」

「豪儀だな、其奴あ、」とくるりと廻つた、頭の法然天窓は竈の陰に赫々して、

「よ、まあ此方へ來ねえ、松の鮓の兄哥、入れつてことよ。」

強ひられて、源さん止むことを得ず。

「御免なさい。」

「さあ／＼、」と婆さんも七十ばかりだが如才ない。

「聞きねえ、婆さん、御前なんざあ上草履で廊下をばた／＼の方だつたから、情人を達引くのに、何うだ、恁云ふものは氣が付くめえ。豪儀なもんだぜ、こら、何うだ素晴らしいもんどやあねえか。」

頭は籐表を打つた、繻珍の鼻緒で、桐の杵といふ、源次が私生兒を引放して、片足打返して差出した。

「ねえ、こら。」と引くり返して鼻緒を掴んで一寸捻る。

「何うしたんだね、」と婆さんは膝に手を乗せて蹲まつたまゝ呆れて見て居る。

頭は大袈裟に、

「何うした處かい、近頃評判なもんだ。これで五丁町を踏鳴すんだぜ、お前も知つてるだらう、一年の仁和加に狒々退治の武者修行をした大坂家の抱

妓へな。
「

「蝶てふきち吉きちさんかね。」

「うむ、此この節せつあ數す寄き屋や町まちに居ゐらあ、那あの跳はッ返かへりめ、お先さき走ばしりで、何なんでも來こいだから、仁に和はの時ときも、一本ほん引ひッこ抜ぬいて使つかふんだからッて、それ痛いたい目めに逢あはないだけにして、本ほん式しきに習ならひたいといふので、お前まへとこの藤とうさんに仕し込こんで貰もらつたな。」

面めん小こ手てで竹しな刀ひつを引ひ擔かいでお前まへ、稽けい古こ着ぎに、小こ倉くらの襠まち高たかか何なんかで、朴ぼくの木き齒ばを引ひ摺ずつて、此こ處ゝの内うちへ通かよつちや、引ひけると仲なか之の町ちやうを縦たて横よこ十もん字じに鳴ならして歩あるいた。此こ處ゝにおはします色いろ男をとこも鳴ならすこと其その通とほり。」

其それがだな。那あのお茶ちやびいめ、ついで此こ間ひだまで竹たけ馬うまに乗のつたり、學がく校かうの生せい徒とに引ひ張ひり出だされちやあ田たん圃ぼでぶらんこをして居ゐたつけが、何どうだい、一ばん此この男をとことおつこちやあがつて、それ、お歳とし玉たまに内ない證しよだよ、と遣やりやあがつたんだとよ。驚おどろくぢやあねえか、此この下げ駄ただといつて、又また引ひくり返かへした。頭かしらは竈へつの前まへに兩りやう足あしを擴ひろげながら、片かた手てで抜ぬ取とつて銀ぎん煙ぎ管せるを銜くはへ、腰こし

なる兩提ふら／＼と莨を捻る。

「おや、」 といった限、婆さんは豫て其の蝶吉といふのを知つてるほど、おつこちたと謂はるゝ男、即ち之なる源次郎のせめてそれだけでも止して頂きたい、目金を乗せた鼻の形と、件の下駄と交る／＼見競べて解せない顔附。

頭は悠然と煙を吹して、

「何しろ素晴らしいもんぢやあねえか、可恐しい。幾らだとか言つたつけな、んゝ何うだらう、うむ、豪儀な。」

言ひやうが餘り業々しいので、取合ふ氣もなかつた婆さんも近々と目を寄せて、

「頭、こりや今の流行かい。」 と老いたる事をまじ／＼と言ふ。

之を聞くと叱るが如く、

「これ庫の七戸前も嘗めた口で、何だい、其の言

ひ種は、かう源坊、若い中だぜ、年紀は取るもんど
やあねえの。此處に居る婆さんは、これでも仲ぢや
あ葛の葉といつて其の昔は賣つたもんだ、ずうつと
それ、

「止しねえな、見つともない、」と穩に微笑ん
で目を外した、もう佛に近いのである。

「舊の直で二朱位か、源坊、幾らだとかいつたつ
けな、二兩二分。」

「頭、三圓、」といつて件の鼻を仰向にして澄
す。

「あゝ、三兩二分か、何でも二分といふ端だけは
付いてると聞いたよ。然うか、三兩二分か。ふ、豪
儀なもんだ、一寸した碁盤より直が張つてら。格子
戸で、二間なら一月分の店賃だ、可恐しい、豪傑
な。」と熟々見ながら、うつかりしたか、下駄の
肚で吸殻を丁。

源次慌しく、

「頭、」

「ほい、これは。」

「然し何うも可恐しい氣前だぜ。尤も那の蝶吉と
 いやあ、いつかも客に連れられて中の植半へ行つた
 時、お前、旦那がずツしり重量のある紙入を之見よ
 がしに預けるとな、肯かない氣だから、這麼面倒臭
 いものは打棄つちまふよ。まさかと思ふから、うむ、
 可いとも大川へ流しツちまへ、といったが災難、仲
 店で買物をして、お前紙入は、といふと、橋の上か
 ら打棄つたと言はあ。本當か、とばかりで眞蒼にな
 ったとよ。然うだらう、二百圓足らず入ツてたんだ
 さうだ。

「其だもの此の位な達引は爲兼ねめえ。」といふ、
 高が這麼下駄を（爲兼ねめえ。）といふほどの
 事はあるまいと思ふほど、頭が爲振を見て、婆さん
 は此年紀になつても其の瞼の黒い目に、逸疾く仔細
 があらうと見て取つた。

源次も何となく氣がさして、少し不安心になつた、
 引構で、

「頭、もう澤山だ。」

氣可愧しさうに装つて、もぢつきながら、出して取らうとした手を、外して持更へ、

「遠慮をするなツて事よ、何もはにかまうツて年紀ぢやあねえ。落語家の言種ぢやあねえが、何故歸宅が遅いんだツて言はれりやあ、奴が留めますもんですから、なんてツたやうな度胸があるんぢやあねえか。」

「何又詰らないことを、」

「それでなくツて、何うしてお前、これが長火鉢の上へ持出されるもんか、此間もお前、脱いだ奴を持つて上つて、傳が家の帳場格子の中へ突込んで見せたといふぜ。」と風見の鴉がくるりと廻つて、少し北風が吹いて来る。

「え。」

「其時ぶん撲られなかつたのが目つけもんだ。」とづつきり言つて、したゝかに氣を替へる。

ひやりと應へて、

「何だつてね、」

「婆さん、もう一燵とやりや何うだ。」

といひながら突込むやうに煙管を納れた、仕事に懸る身構で、頭は素知らぬ顔をして嘯きながら、揃へて下駄を搔摑めり。

形勢穩ならず、源次は遁足を踏み、這身になつて、搔裂くやうな手つきで、一寸と出し、一寸と引き、取戻さうとしては遣損ひ、目色を變へて、

「頭、何ですから、急ぎますから、」

「跣足で駈出しねえ、跣足で。それが可いや、可恐しく路が悪いぜ。」

又一當當てられて揉手をして、

「穿いて行きますよ、よ、穿くんだから、頭失禮ですが、其。」

「穿かねえでさ、下駄は穿くに極つたもんだ。誰がまあ頂く奴があるもんか。だが、それ懐へ入れる

奴は無えとも限らねえ、なあ、源坊。」

「私や些と何だから、これから少し急ぐんですか
ら、」

「何處へ急ぐんだ。何處へ、」

「え、些と其の、何で。これから發句の會があ
るんです。」と捨鞭で歌を讀むやうな見得をいつ
た。

「發句の會、あ、然うか。源、何、何とか云つ
たな、其の戒名、いや俳名よ。待ちねえ、お前なん
ざあ俳名より其の戒名の方をつけるが可いぜ、おい
らが一番下駄の火葬といふのを遣つて、先きへ引導
を渡して遣らう。」

「ひやあ、」

「馬鹿め、跣足で失せやあがれ。」

通ふ神

十一

「おや／＼、酷く曇つてるなあ、何だかこれぢやあ君を送つて来たやうだが、神月君。」

龍田は校内の園を抜けて、彌生町の門を出ようと
して空を見たのである。

「一所に散歩をしようと思つたけれど、降りさうだから僕はもう失敬するよ、それぢやあ君、議論は議論だが實際は實際だ、よく考へて軽忽なことを爲給ふな。」と年下の友に熟々言はれて、唯打頷くのは神月であつた。

「それでは。」
「失敬。」と言ひ棄て、龍田は門から引返した。暗がりの中を詩を唱つたが、低唱して躑躅して聞えなくなつた。

梓は二廻して歩を轉ずる、向から來て、ばツたり。

「えツ。」といつて何物か身を開いて退つて神月の姿を透し、

「よ、先生か。」と冷評すやうな調子で言つた。

是は松の鮨の源次郎で、蝶吉から頂いた、土付かずといつて可い大事の駒下駄を、芋を焼く竈に焚られた上に、けんつくを啖つて面目を失つたが、本人に聞くより一段情無い愛想盡しを、頭の口から、然も意見する如く言ひ聞かされ、お穿物といふ謎まで聞いて、色男堪忍ならず。胸はひツくり返るやうだが、触手と胸倉を取られると、目の玉が出さうな豪傑の頭を對手には文句も言はれず、居耐らなくなつた處を、燎に燻されて泥に酔つたやうに駈出して來たのである、が、自分から顛倒して居て突當つた人を見ると、蛇の道は蛇で、追廻す蝶吉が又追廻す探索は届いて、顔まで見知越の戀の仇。戀に上下の差別がないから仇に上下の差別はない、學士神月梓である。むかつ腹立の八ツ當りで、

「ふん、色男も凄じいや、汝が孕ませた兒を墮さ

れりや澤山たくさんぢやあないか、お政府かみへ知しれて見みる、二
人りとも、泥どろを嚙かじるんだい。知しつてゝいはないのはお
慈悲じひだと思おもふが可いい。此方こつちから突つき當あたつたらな、其方そつち
からあやまつて、通とほるこつた。人ひとをつけ、學者がくしやも其
で澤山たくさんだい、色男いろをとこ萬歳ばんざいだな。」

と影かげの添そふが如ごとく七八歩ほ、學士がくしに添そつて逆戻さかを
し
て歩あるいたが、

「様さまあ見みる色男いろをとこ、面つらが見みてえや、青あをいのか、赤あか
いのか、やい、七面鳥めんでうの文學士ぶんがくし。」と惡あくたれ口くちを吐つ
き棄すてゝ擦違すれちがつて駈出かけたした。學士がくしは歩あゆみ惱なやんだ様子やうす
で、弗ふと足あしを留とめたが有さす繫がに後あとを見みも返かへらず、取と
にも足たりない下司げすの雜言ざふごんと思おもつたから。

「雨あめか。」

空そらを見みると雲低くもひくく、ひやりとして頬ほに雫しづく、又またぱら
／＼と二ツ三ツ。

「あゝ、」と咳つばせいて、恰あたも此この滴しづくに懸かるまいと
する如ごとく、彼方かなた此方こなた身みを交かはして歩あるいた。

最初^{はじめ}は唯^{ただ}、廂溝^{ひさしみぞ}などを幽^{かすか}に打^うつ音^{おと}のみであつたが、
躑^{やが}て、瓦屋根^{かはらやね}に當^{あた}つて又^{また}ぱら／＼。

「厭^{いや}だな、」

見^みる／＼繁^{はげ}しくなつて、颯^{さつ}と鳴^なり、又^{また}途^と絶^だえ、颯^{さつ}
と鳴^なり、又^{また}途^と絶^だえ／＼して居^ゐる内^{うち}に、一^{せい}齊^{せい}に木^この間^ま
に灌^そぐと見^みえて静^{しづか}な空^{そら}は一^{めん}面^{めん}に雨^{あめ}の音^{おと}。

神月^{かづき}は見^みえなくなつた。

御待合歌枕。磨硝子の瓦斯燈で朧の半身、背に御神燈の明を受けて、道行合羽の色くつきりと鮮明に、格子戸の外へぐつと出ると突然柳の樹の下で、新しい紺蛇の目の傘を、肩を窄めて両手で開く。顔は其の中に隠れて見えず、丈の好いすらりとした瘦ぎすな立姿。桃色縮緬の扱帯で、弱腰を固くしめて居る。白足袋で、黒の爪皮を深く掛けた小さく高い足駄穿で、花崗石の上を小刻の音、から／＼と二足三足。頭が軒の下を放れたと思ふと、腰を伸して、打仰いで空を見た。

此處に引着けた腕車が一臺。蹴込に腰を掛けて待つて居た車夫、我が主來れりと見て、立直り、急いで美しい母衣を刎ねる。楫棒に掛けて地に置いた巳之屋と書いた看板は、新しい光を立て、蠟紙を透す骨も一ツ一ツ綺麗である。

「おや、降つちやあ居ないんだね。」 静に蛇の目を窄めて片手に提げた。鼻筋の通つた細面の凜とした、品の良い横顔がちらりと見えたが、浮上るやうに身も軽く、引緊つた裙捌で楫棒を越さうとする。

「此方へ、」 といつた車夫は小腰を屈めて、紺蛇の目を手早く受取る。其の腕車に乗らうとする時、かち／＼と木を拍つて、柳の彼方の黒塀の前に、頬冠をした二人が在つた。

「へい、御鼻屑を一兩名、尾上菊五郎、澤村源之助。」 ト聲を懸けたので、腕車の蔭に立停る。

其時、板塀の上なる二階の障子へ、明るく影が映つたが、端を開けて、廊下へ出た。植込の梢がくれに、

「あいよ、」 といふ聲、捻つた紙包が宙を切つて、忍返の釘を掠めて礎と二人の前に落ちる。

「え、鼠小紋春着新形。神田の與吉實は鼠小僧次郎吉、傾城松山、」 一寸句切つて、

「鎌倉山の大小名、和田北條をはじめとして、佐々木、梶原、千葉、三浦、當時一臈別當の工藤などへは二三度入り、まぶな時にやあ千と二千、少ねえ時でも百や二百、仕事をしねえ事あなかつた。其替りにやあ貧乏と、其名の高え曾我などぢやあ、盗んだ金を置いて来た、悪事はするが義理堅え、謂はゞ野暮な盗人だが、知らねえ先あ兎も角も、恚う云ふ身性と聞いたならば、お主やあ厭になりやしねえかね。」

「何んで厭になるものかね、これもみんな其の身の好々、お嬢さんといはれるのが、ちひさい時から私や嫌ひ、油で固めた高髷より、つぶし島田に結ひたい願ひ、御殿模様の文字入りより、二の字繋ぎのどてらが着たく、御新造さんや奥さんと、いはれるよりも内の奴、内の人かといひたさに、親をば捨て、勘當うけ、お前の女房に成つた私、どんな事があらうとも、何で愛想が盡きやうぞいな。」

菊「そんならおぬしやあ盗人と、知つても矢張愛想も盡さず、」源「お前と一所に居たいのは、譬にもいふ似た者夫婦、」菊「夜盗を働く鬼の女房

に、「源「枕探しの鬼神とやら、」菊「然うい
ふお主が度胸なら、明日が日ばれて縄目にあひ、」
源「お上のお仕置受ければとて、」菊「隙行駒
の二人連、」源「二本の槍の二世かけて、」菊
「離れぬ中の紙幟、」源「果は野末に、」菊
「身は捨札、」源「思へば果敢ない、」
「紀之國屋」引「と思ひがけず、暗がりの露地
の後の方で、うら若い清しい聲。

「ほゝゝゝほゝ、」 と蓮葉に仇氣なく笑つたが、
再び、

「紀之國屋！」 とあてもなく漫ろに氣の冴えた
高調子。酔つたと見えて、ふら／＼して假色使の背
後に立つて、

「嬉しいねえ、」

といひながら、無遠慮に一人の肩を叩く。吃驚
して黙つて呆れる、女は罪もなくまた笑つた。

「ほゝゝほゝ。」

「おや！ お蝶さんだ。」 と二階の欄干に凭懸
つたのが、思はず威勢よく聲を立てた。

振りあげ、
振仰いで、

「今晚は。」

「神月さん参りました、來たんですよ。」 と言
つたが障子の中に姿が消えた。

「へい難有う様でございます。」

度膽どきもを抜ぬかれて、茫然ぼんやりした假色使こわいろつかひは、慌あわて、見當けんたうを失うしなつたか、却かへつて背後うしろに立たつたのに禮れいをいつて、

「さあ、」

「おい。」

踵くびすを廻めぐらすのを見も返かへらず、女をんなは身みを斜なぐめに又また蹠よろ踏ふけて、柳やなぎの下したを抜ぬけようとした。

門口かどぐちで、

「蝶てふちゃん、」

「はい、」

「お氣きを付つけなさいよ。」

「才さいちゃんかい。」

「お樂たのしみだね。」

とひらりと乗のる途端とたんに楫かぢ棒ぼうを取とつた、腕車くるまの上うへか

ら、

「然さやう様うなら。」

「チャチャチャツチキチツチドンドン。」
「かる軽く柳やなぎの枝えだの垂たれた尖さきを細ほそく指ゆびで叩たいて見みせる。」

「ふん、」
とばかり腕車くるまの上うへで。見みぬやうにし

一寸見ながら面を背ける、途端に車夫は曳き廻らした。暗夜の小路を看板は、これ流星の如くに去るぬ。

「チャチャヤツチキツチ、」と低く口吟みながら、格子戸をがらりと開けると、同時に框の障子を開いて、

「よくねえ、」と聲を懸けて、逸早く今欄干に立顯れがた其の女中が出迎へた。帳場の灯と御神燈の影で、爰に美しく照らし出されたのは、下谷數寄屋町大和屋が分の蝶吉である。

着つけは濃いお納戸地に、金で乳菊を織出した縹珍と黒縹子の打合せの帯、瀧縞のお召縮緬に勝色のかはり裏、同じ裾を二枚襲ねて、もみぢに御所車の模様ある友染に、緋裏を取った對丈襦袢、是に、黒地に桔梗の花を、白で抜いた半襟なり。

洗髪の漬島田、ばつさりして稍ほつれたのに横櫛で、金脚五分珠の簪を纒に見ゆるまで挿込んだ、目の涼しい、眉の間に曇のない、年紀は未だ若いのに、

白粉おしろい氣けなしの口紅くちべにばかり、小肥こぶとりして瘦やせては居をらぬが、幼をさない時ときから、踊をどりが自慢じまんの姿すがたである。

出迎でむかへた女中ぢよちゆうは前まへへ轉のめつたと思おもつて慌あわたしく身みを開ひらいて、

「あれ危あぶないぢやありませんか、」

蝶吉てふきちは躓つまずくやうに駒下駄こまげたを脱ぬいで、俯向うつむけに蹠よろげ込んで、障子しやうじに打撞ぶつからうとして、肩かたを交かはし、退すさつて、電燈でんとうを仰あふいで、踏ふみしめて立たつた。ほツといふ酒さけの息いき、威勢あせいよく笑わらつて、

「今晚こんばんは。」

「蝶さん、奢らせませよ。」と帳場から呼んだのは女房である。此の待合は其の座敷、其の器物、其の取扱、何に就ても結構なものではない。五人一座の二人までは敷かせる座蒲團の模様が違つて、違つた小紋も、唐草も、いづれ勸工場ものにあらざるなく、杯洗と海苔とお銚子が乗つて出るのも、牛屋のちやぶ臺の眞中へ丸く木を填めてあらうといふ組織であるのに、お座料が亦必ずしもお安くはない。これでは何の取得もないが、爰に注意すべきは女房たるもの、兄と其の情人の如きもの、且つ女中に至るまで、よく注意して秘密を守り遂げる信用があるので、知れては身分に係はるといつた側が、ちよい／＼懐手で出入する。

敢てものゝ三角形が秘密を守るものだといふ數學の原理はないけれども、歌枕の女房は目の形が三角である。鼻が三角で、口が三角、眉を拂つた痕が又三角なりで、頤の細つた頬骨の出た三角を逆にして

顔の輪郭の中に度を揃へて並んで居る。白ツぽい絲織の羽織の裙を拂つて、金の平打の指環を嵌めた手を長火鉢の縁から放し、座蒲團を外してふはりと立つと、むツくりと起きた飼犬が一頭。

眞鍮の首環をぐわちや／＼と鳴らして、さら／＼と畳を渡り、蝶吉の裾を掠めて、取着の階子段へ、矢の如く駈け上つた。

此の犬、一舉一動よく主婦の意を知る、今其の座を立つたのを見て的切二階へ上るのだと目敏く先へ立つて飛出したのであるが、段を六ツばかり駈上ると、振返つて猶豫つて待つてゐる風情。三角の主婦は悠々として、

「さあ、お二階へ。」

「お早く行らつしやいな、」と傍から又女中が促した。

蝶吉は雨の朝櫻の色しつとりとして、瞼に色を染めながら、

「厭ですよ、」とすねるやうに言つて肩を振つた。

「可いのかい、一寸那樣ことを言つて、」
「何うせね、」と主従が澄して莞爾して左右か

ら顔を覗くと、

「犬が恐いのよ。」と段階子を見込んで笑ふ。

主婦はつか／＼と前に出て、目をきよろつかして伺つてる飼犬を見上げながら、左の手を袖の中へ引込ませて、一寸出して、指をさすと電氣を感じたやうにくるりと廻つて、小犬はちよろ／＼と駈け上る。

「可けない！」

といふが疾いか、段に片足を上げて兩手を支く、裾を引いて、ぱつたり俯向に轉ついに綺麗な體は、結へつけられたやうに階子に寝た。

「危い。」

「あれ、」とけた／＼ましく諸聲に叫ぶのを耳にも入れず、蝶吉は其のまゝ腕を伸して、

「不可ません、不可い、不可いよ、」と蹠跟ける足を引摺つて、

「畜生、私より先へ行くツて法があるかい。」

「おいで。」

と膝を軽く拍つて、振り返つたのは梓である。

上口の處で、くる／＼廻つて居た飼犬は、呼ばれて猶豫はず衝と飛込み、いきなり梓の袂に前足を掛

けて、ひよいと其その膝ひざに乗のつて畏かしこまった。
「不可いけいなツたら！ あれ。」

「失敬な奴ぢや、てツたやうな譯だわね、不都合だよ、いけすかない、何だ手前は、」 ふう／＼するのを踏こたへて、

「誰に斷つたの、畜生、此方へ來ないかい、打つて遣るから、」 と袖を翻して、手を舉げたが、其のまゝ立つてるさへ物憂げであつた。

「誰が打たれに、」
梓は俯向いて、犬の天窓をこれ見よがし。

「厭よ、厭よ、私は厭ですよ。那樣もの、打つちやらかしてお了ひなさいなねえ。」

「恐いな、何處かの姐さんが、打つちやらかしてお了ひなさいなねえツて言つてるよ。」

「焦れツたいねえ。」
梓は笑ひながら犬の前足を取つて伸すと、飼犬は口を開けて、目を光らして、わツ!

「悔しがつてるぢやあないか、」 と横顔を見せて振向いた。

「何故さうですよ、言ふことをお聞きなさいなね、えゝ焦れつたい、」

地踏^{ぢだんだ}を踏^ふんでも澄^{すま}して取^{とり}合^あないので、

「悔^{くや}しい。」

と横^{よこ}を向^むいて上^{あがり}口^{ぐち}の壁^{かべ}を、構^{かま}ひつけず平^{ひら}手^てでどん／＼どんと撲^{なぐ}り付^つけて體^{からだ}を揉^もむ。酔^よつてる處^{ところ}へ激^{はげ}しく動^{うご}いたので、がつくり膝^{ひざ}が抜^ぬけて崩^{くづ}れようとして、纒^{わづか}にこらへ、搔^か筆^{いむし}るやうに壁^{かべ}に手^てを縋^{すが}つて、顔^{かほ}を隠^{かく}して吻^{ほっ}といふ息^{いき}を吐^ついた。

「何^どうしたんですよ、」

階^{はし}子^ご段^{だん}を上^あり／＼、主婦^{おかみ}は物^{もの}音^{おと}を怪^{あやし}んで來^きたのである。

「おや、おや、」

「言^{もん}句^くばかり言^いつてるさ、構^{かま}はないで置^おくが可^かい。なあに汝^{おまへ}が先^{さき}へ來^きたつて何^{なに}も仔^し細^{さい}はなからうぢやないか。」

「其^そのことなんですか、まあ、飛^とんだ難^{むづ}かしいこと、トン！」

わツと吠^ほえて前^{まへ}足^{あし}を立^たてた、トンは飼^{かひ}犬^{いぬ}の名^なであらう。

「おいで、おいで。さあ、」

「私わたい、厭いや、厭いやよ。」

「泣ないてるんだよ、おや、ま、何どうしたッてこッ

たらう。驚おどろきますねえ、」

と平ひら手を二ふたツ乳ちの上うへへあて、目めを三みつて、

「為しやうのない嬰あ兒かちゃんだよ。」

「何うにかして遣つておくれ、面倒だから。」

梓は膝からトンを掻退けて、座も言葉も更めて言

つた。

「さあ、あなた、」とこれもちやんと極つて背に手を掛けると、譯もなく振拂つて、

「厭です。」

「拗るもんぢやあゝりません、那の方が来て在らつしやるのに、何が氣に入らないで、じれてるんですよ、母様は知らないよ。」

といつて一つ打つ。

「痛いよ、——」

「嘘ばツかり、」

「厭よ。」

「何が厭なんですツてば、よ、焦れツたい人だ。」

えゝ、

蝶吉は身顛して、

「姐さん、」

「才ちゃんは疾に歸りました、居やあしませんよ。」

さあ、さあ、もう聞かなきゃ恚うして、」

「あれ。」

蝶吉が身悶するのを、主婦は構はず撥つたが、吃驚して肩を抱いた。

「おや、本當に旦那、本當に泣いてるんでございますよ。堪忍して下さい、堪忍して下さい、悪かつたよ、何うもお前さん唯もう嬉しがつてるんだらうと思ふもんだから、つい知らないで、飛んだことをしたよ。濟まなかつた、」

極めて後悔し、其のまゝ首を伸して、肩に搦んで顔を覗くと、眞赤になり、可愛い目を細くして、凡そ耐らないといった様子で、麗艶に微笑んで、
「嬉しい！」 とばかりで斜に顔を向けて、主婦の面と、神月の横顔を流眄に見ながら蝶吉は莞爾する。

「畜生。」

小さくなつて、

「撥りツこなしよ、私はもう撥られると死ぬんですから、酷いわ、一番恐いことよ。」 といひなが

ら澄して壁を離れ、裾を拂つて立直る處を、兩手で背後から突飛ばした。

「可憎しいツたらないんだもの。」

壁には薄り、呼吸の痕と、濡れた脣が幻に其まゝ残つて、蝶吉の體は源之助の肖顔畫が拔出したやうになつて、主婦の手で座敷の眞中へ突入れられて、足も溜らず、横僵れになつたが、男の傍。

恰も好し、梓の膝を枕にして、片手を逆に支いて起上らうとしたが、支へかねて半面を隠して倒れた。件の御所車を染めた友染の長襦袢は、かはり裏のしどけない、裳をこぼれて媚めかしい。

男は懐にした手を出しもやらず、眉を顰めて、

「何だね、其形は。」

「可くツてよ。」

「可かあない、かみさんが見て居るよ。」

「可いのよ、ねえ、おかみさん、」

「何うですか。」と極めて慎重に答へた。主婦

は心なく飛込むも異なるものなり、其のまゝ階子段へ引退るも業腹なりで、阿容と見せられる。

「不可いッたツて爲方がない。」

と其の玉の如き手を疊に、はつたり。

「私わたいはもう草くた臥たれたんです。」

「重おもい、爲しやうがないな、おい、ちやんとおし

よ、」と揺ゆり落おとす勢いきほひで、梓あづなは邪じゃ険けんに肩かたを振ふった。

「あら、髪がこはれてよ、」 と少し横になつて、
蝶吉は片手を上げて仰向けに梓の胸を押へて、恍惚
して嬉しさうに、

「鬢のほつれは枕の咎よーー あれさ、ぢつと
して在つしやい。後生だから、」

「構ふもんか、怪しからん。」 と男は故と叱る
やうに言つて、振落さうとする。

蝶吉は目を瞑つて、口をしめ、眉を顰めて、然も
切なげに装つた、

「頭痛がしてよ、頭痛が、天窓が痛いのに、酷い
ことねえ。」

「嘘を吐け、」

「あなた撥つてお遣んなさいまし、」 と主婦は
焦れつたさうに足踏をした。

黙つて主婦を見たが、神月は下を向いて、

「止さう、見ツともないから。撥ると最後、きや
つ／＼いつて其の騒々しいといつたらないもの。」

「おや、何時も撥るんだと見えますね、あなた

は。
「

「え、何、下らない、何を言ってるんだ。まあ、おかみさん、飲むさ、此方へ来て。」 神月はこれをキツカケに片腕をちやぶ臺に支いて、稍所在を得たのである、爲方のなかつた懐中の手は、猪口を取つて、一寸上げて、

「飲むさ。」

「いえ、頂きますまい、那樣ことでごまかさうたつて駄目ですよ。まあ、串戯は止して早く拵へさせますから、寝かしてお上げなさい、本當に酔つてるんですよ、全く苦しさうだわ。」

主婦は一切呑み込んだ顔附であつた。神月は其とはなげに、

「直ぐ歸るんだから、何だよ。」

「ですから誰もあなたにお休みなさいとは申しません。」

と悪く切口上で、別にお爛を見ようともせず、上口に先刻から立つて居たまゝで、二階を下りようとする、途端にちやぶ臺の片隅に蹲つて、洋燈の影で

見えなかつたトンは、むツくりと跳起きて首輪の音をさして座敷からつツと出た。

「何處で那樣に酔はされたんだ、よ。」

神月は期せずして主婦を下に去らしめた件の猪口を棄て、手を其の小さな女の胸に置いたのである。熟として、

「存じません。」

「存じないことがあるものか。」

「解らなくツてよ。」

といつて清しい目をぱつちりと開いた。蝶吉は、男の、凜とした品のいい、取つて二十五の少い顔を、しげ／＼と嬉しさうに瞶めて居る。

「それぢやあ、酔はされたんだとはいふまいから、何處で飲んで來た、それなら知つてるだらう。」

「あなた、又叱らうと思つて、厭よ。那樣眞面目な顔をして在らしぢやあ。だつて少し

ばかりなんですもの、」といひ懸けて目を外し、枕にして居る神月の膝を着物の上から撮んだが、固くちやんとして居るので、指尖にかゝらない、絹布に皺を拵へようと、抓るでもなく、撫でるでもなく、

爪つまさぐつて莞爾にっこりして、

「可いいぢやあゝりませんかねえ、少すこしばかり、偶たま々たまたまなんですもの、大丈だいぢやうぶ夫ぶさ。」

「大丈夫？ 然うさ、又大丈夫でなくつたつて誰

が何といふものか、酒はお前さんが飲むんぢやあな
いか、そしてお前さんが酔つたんだらう、藝者の蝶

吉が酒に酔つたつて、私にやあ甘くも辛くもない、
何も難しいことはありません。」と向へ押遣ると、

銚子が袴を着けたまゝで、盤の上をする／＼と歩い
た。杯は一個横になつて、飲みさしが流れて居た。

敢てこれを細く断る必要はないけれども、丁度其の
銚子が歩いた時、蝶吉が起きたからのことである。

梓の羽織の袖に、鬚摺合ふばかり附着いて横坐に
なつたが、鹿爪らしく膝に手を置き、近々と顔を差

寄せて、

「おや、異う仰有いますね、異なことを。何です
ツて、」

蝶吉は詰め寄りさうにしていつた、梓は今さらし
た銚子を更に手許へ引ひいて、

「先づお酌でもして頂かうかね、お爛ざましぢや
あゝりますけれども、」

「ふん、」と言つたばかりで澄すまして見て居ゐる。

「如何いかゞでございます、頂いたゞく譯わけには參まりませんか、何どうです、蝶てふさん、此處こゝには是非せひ一番君ひとつきみのお酌しゃくをといふ、厄介やくかいな、心懸こころがけの悪いわるのが出來上できあつたんですが、悪わるうございますか。」

「はあ、随分宜ずぶんよろしうございませう。」

梓あつなは猪口ちよくを拾ひろつて、杯洗はいせんの水みづを切きり、

「結構けつこうな譯わけね、宜よろしければ、何どうぞこれへ、」

「おや、唯今たゞいま内うちの人ひとにおことづけをなさいました、蝶吉姐てふきちねえさんに酌しゃくをして欲ほしいと仰おつしや有あいますのは、一寸ちよいとお前まへさんかい。」

「私わたくしでございます。」

「お、心懸こころがけの可いい奴やつぢや、宜よろしい。さあぐツとお飲のみ。餘あまり酔よはないやうに致いたせ、これ、女房かみさんがまた心配しんぱいをするさうぢやからな。」

「畏かしこまりましたが、一向かうさや然や様なものはございませぬ。」

「なくても今いまに出來できます。其その心懸こころがけなれば屹度きつと出で

来るから、然様心得るぢやぞ。」

「はい。」

「一體、容子が可くツて、優しくツて、其で悪く又學問とかゞお出来遊ばしやあがつて、知つた顔をしないでな、若殿様のやうで、世話に碎けて居て、仇氣なくつて可愛らしくツて、氣が置けなくツて、其癖頼母しい、き様は女殺ぢや。よくない奴ぢやぞ。方々の女の子が皆で騒ぎやあがるで、可哀さうに蝶吉が氣ばかり揉んで居るわえ、何故然うぢやるかな。不心得な奴ぢや、其分には差置かれぬぞ。」と覺束なげに巡查の聲色を佳い聲で使ひながら、打合せの帯の乳の下の膨らんだ中から、一面の懷中鏡を取出して、顔を見て、ほつれ毛を搔上げた。其の櫛を取直して、鉛筆に擬へて、

「コヤノ、いつかも蝶吉がお花札を引いた時のやうに警察の帳面につけて置く。住所、姓名をちやんと申せ、僞ると爲にならぬぞ。コヤ、」と一生懸命に笑を忍んで、細りした頬を膨らしながら、唇を結んで眞面目である。最初は何か取合つて遊ぶ意だつた梓も餘りだから、

「何だ、馬鹿々々しい。」

「コヤ、じゆんさ 巡査に向つて何だ、ばか 馬鹿々々しい、さま き様
は失敬しつげいな奴やつぢやな。」

「可加減いゝかげんにして置けよ、めんたうくさ 面倒臭い。」

てふきち 蝶吉は一寸ちよつとひざ 膝を突つツついで、

「よう、おまはり 巡査ごとを爲しようよ、よう、をかし 可笑くツつて
よ。」

あつち 梓は叱しかる譯わけにもゆかず、くせう 苦笑ばん一番して、
「暢のんき氣なもんです。」

手鞠の友

十九

神月梓は學士である。同窓の朋友の間にも、其の温雅なる風采と、秀麗なる容貌と、學識の豊富なるを以て聞えた、俊才で、且つ人魂と、流星と、意見の衝突以來、不快の念を抱いて、頃日夫人の許を辭して、谷中の寺に隠れたけれども、梓は子爵家の婿君である。即ち華族の殿様であつて見れば、世に處して恁る待合などには出入すべき身分ではない。

尤も地位あり、名聲ある人の藝妓遊をせぬといふ限はない、立派に客たる品位を保つて、内に疾ましい處がなければ、未だしも世間は大目に見ようが、梓は然る身分でありながら、一待合の女房を見て、之を（おかみさん）といつて自ら謙り、相手の藝妓を捕へて、おいとも、こらともいふのではない、お蝶さん、おまへさんは、といふ調子たるや、蓋し自ら卑うしたるものと謂はざるを得ぬ。

すくな
少くとも青年の佳士、衣冠正しい文學士が、譬へ
ふたりさしむか
ば二人對向ひの時、人知れずであらうとも獨省みて
ちじやく
恥辱でないことはない。

しか
然るに、梓は舊仙臺の生で、土地の塗物師の子で
あつたが、豊なる家計の下に育つたものではなかつ
た。使に行く問屋の旦那にも、内へ注文に来る餘所
の小父さんにも、隣家の士官の奥方にも、向の質屋
の番頭にも、いつも、可愛がられては居たけれども、
未だ敬禮された覺がないので、人に逢へば先づ此方
から挨拶をするものゝやうに、餘儀なくされて育つ
たのである。

くは
加ふるに、其の母親といふのは、其始江戸から住
か
替へて来た有名な藝妓だつた、のみならず、これを
たよ
便つて同じ仙臺の土地へ後から出て来た母の妹夫婦
も、亦甚だ不遇で、年も措かず夫が亡なつたので活
計を失ふと、女の子が二人あつたのが、姉妹揃つて
くがい
苦界に身を沈た。前世の因縁とでもいふのか、父の
あね
姉の子が一人、梓より年上であつたのが、其も又同
じ勤の止むを得ぬ境遇であつたから、中の好い従姉

妹が三人、年紀の姉なると、妹なると、皆お嬢様では居らず、女房にもならず、奥様には固よりなり、揃つて世の中から畜生呼はりをされる身で。

母親は若死した、臆て父親も亡つた。其の遺言に因れば、梓の實の姉が一人ある。内の都合で、生れると直ぐ音信不通の約束で他へ養女に遣はしたのが、年を経て風の便に聞くと、其も一家流轉して、同じく、左袂を取る身になつたといふ。野邊の送が濟んで、七々四十九日といふのに、自ら恥ぢて、其と知りつゝ今まで遂に音信なかつた姉者人、其頃一豪商の愛妾になつて居たのが尋ねて来て、其の小使と、従姉妹三人が龍の腮を探るやうな思をして工面をしてくれた若干金とで、やう／＼後弔も出来た位、梓の家は窮して居た。

尤も小學を卒へ、中學に入つて、丁度高等學校に入つて居た其の學資は、父が膏血を絞つたものであることはいふまでもないが、従姉妹達が銘々、自分の境遇を悲しむ餘りに、一門の中から切めて一人、梓さんが男だからと、石筆を持つて来る、算盤を買

つて来る。本の栞に美しいといつて、花簪の房を仕
送れば、小さな洋服が似合ふから一所に寫眞を取らう
といつて、姉に叱られる可愛いのがあり。

學校の歸途、驟雨に逢へば、四辻から、紺蛇の目で左袂といふのが出て来て、相合で手を曳いて歸るので、八ツ九ツ時分、梓は酷く男の友人に疎じられた。人は皆竹馬の友を持つて居るけれども、梓は却つて手鞠、追羽子の友を持つて居たのである。

父親が亡つて、姉が初めて訪寄つたのが機會で、梓は高等學校の業を卒へて上京した、學資は姉の手から――其の旦那の懷中から――出たのであるが、學年中途にして志未だ成らず、年紀はやう／＼梓より二ツ上の姉が、兩親の後を追つて、清く且つ美しい一輪の椿、床の花瓶をほつりと落ちた。

最後に其の三人の従姉妹が、頭のもの、帯一本、指環を一ツ賣つたといふ、二十圓餘二月足らずの學資を連引いてくれたまで、あはれ一人は目を煩ひ、一人は氣が狂つたやうになり、いま一人は人に連れられて北海道に渡つたといふ、音信があつて、それなりけり。

といふ境遇であつたので、幼少の折から、紅の曙、
緑の暮、花の樓、柳の小家に出入して、遊里に馴れ
て居たのであるが、可懐しく尋ね寄り、用あつて音
信れた、往くさきノ、ハ、不殘抱であり、分であ
り、いづれも主人持のことであるから、勢已むこと
を得ず、帳場に片膝立てゝ居る女房に挨拶をせねば
ならず、奥に搔卷を懸けて晝寢をして居る、亭主に
天窓を下げねばならない。

單に然云へば梓が酷く意氣地のないやうに聞える
けれども、人の召使は我が召使ではない、玄關番の
書生が、來客の履を取つて送迎するのを見て、來客
たるもの、自家を尊大にして己に従ふものだと思ふ
のは失敬であらう。履を取るは即ち主公に使ふるの
道で、敢て來客に對する禮ではないから。

藝妓も自家これに客となつて、祝儀を發奮み、玉
を附けて、弾け、飲め、歌へ、酌をせよ、と命令を
奉ぜしめた時ばかり、世の賤業を嘗むものとおとし
めて宜しいけれども、臂鐵砲に癩癩玉を込めた、ド
ンを啖ひ、鳩豆で引退るに當つてや、客たるものは

商しやうとなく、工こうとなく、武ぶとなく、文ぶんとなく、戦たつかひに敗まけたものと謂いはなければならぬ、況いはんや、さつさと貫もつはれてのツけから、對手あひてにされざるものに於おいてをや。

忘八ぼうの亭主ていしゆ、待合まちあひの女房おかみといへども、己遊客おのれいつまやかくとなつて之これが敬禮けいれいを受うける場合ばあひでなく、一こじん個人こじんとしてこゝに訪とひ寄よれば會釋あしやくをしなければならぬ數すうで。

縦令たとひ、賣淫婦ばいじんぶといへども其その妹いもとたるものは、淑女しゆくちよであつても渠かれは姉ねえさんである。譬たとひ山賊さんぞくといへども、山路やまちにおのれ蹈迷ふみまよつた時寸毫ときすんがうの害くわいも加くはへられずして、却かへつて此方こなたより道みちを聞きいて、麓ふもとに下おりることを得えたりとせんか、渠かれは恩人おんじんである。世よを害がいするものなりといつて訴人そにんに及およぶは情じやうに於おいて忍しのばるゝ處ところではあるまい。然しかるにこれこれを訴人そにんして、後のちに様さまあ見みるをくらつて、のり血へにになつて悶もがくのは、芝居しばゐでも名題なだいの買かつて出でぬ役廻やくまはりであらう。

母ははをはじめ、姉あね、從姉妹いとこ、幼時えうじに於おける梓あひなが七情しちじやうを支配しはいしたものは、皆苦勞人みなくらくにんであつた。敢あへてこれ天てん

下に憚る處なしといへども、然れども、數の奇なる
もの、顧れば無慙な境遇。

湯歸り

二十一

梓が上京して後東京の地に於て可懐のは湯島であつた。湯島も其の見晴の鐵の欄干に怗つて升形の家が取圍んで居る天神下の一廓を詠めるのが最も多く可懐しかつた。

可懐しさも宛然過世の夢をこゝに繰返すやうなもので、敢て、此處で何等のことを仕出したことはないが、天神下は其の母親の生れた處だといふことに就てゝある。

然れば故郷を去つて獨り寄宿舎に居る、内氣な、世馴れない、心弱い、美少年は、其の界限に古びた廂を見ては、母親の住んだ家ではあるまいかと思ひ、宮の鰐口に絶つては、十七八であつた時の母の手が、これに觸れたのであらうと思ひ、左側に並んだ意氣な二階家の欄干、紅裏の着物が干してある時、夜は殊に障子に鏡立の影の映る時、いつも／＼心嬉しく

姿寂しく、哀れさ、床しさが身に染みて、立去りあへずイむのが習であつたが、戀しさも慕しさも、たゞ青海の空の雲の形を見るやうに漠然とした、幻に過ぎなかつた。然るに或時、それを形に現して、梓の感情を支配する、即ち、床しい、懐しい念の總てを以て注ぐべき本尊、譬へば婦人が信仰の目じるしに、優しい、尊い、氣高い、端嚴微妙なる大悲觀世音の御姿を持つてるやうなものが出來たのである。

丁度玉司子爵の令嬢いまは梓の夫人たる龍子から、未だ佛文の手紙の來ない先、姉が死んで、從姉妹が離散して、學資が途切れたので、休學して暫く寄宿舎を退いた間、夫婦で長屋を借りて世帯を持つて居たいさゝかの知己の處に世話になつたが、其主人又大の貧窮で店立を命ぜられて、一日九尺二間の城を明渡すの止むを得ざること立至つた。其日も梓は例の如く、不遇の身を湯島の境内に彷徨はせて、鐵欄干に遣瀨なう時を消して暮方に家に歸らうとする、途中で會つた友達夫婦が、一臺の荷車の兩脇に附添つて、妻戀の下通を向うから曳かせて來て、

(天神下の××番地へ引越す、後から來給へ。)
(神月さん、其時此の車に附けあまつたがらくたを隣家へ預けて來たんですから、車を雇つて持つて來て下さいな。)

と暢氣なもので別れて行つた。意を了して、其頃同朋町に店借をして居た長屋に引返して、残りの荷物を纏めたが、自分の本箱やら、机やら、二人乗には積み切れないで、引越車を又一輛。

天神下までは路も近し、洋燈を手にして宰領して、男坂の裏を抜けて、目的の處へ行くと、さあ知れない。

向うが言ひ違へたか、此方で間違へたかい覺えた番地を差配にまでかゝつて尋ねたが、皆くれ分らず、荷車について、ぐる／＼廻つてる、日は暮れる、暗くなる、二三時もかゝつたので、間が抜けてるぢやありませんか、と曳子はぶつ／＼叱言をいふ。引返した處で寝る家もない場合。梓一人が迷惑して困じた切つて居る處を、灯がないと、交番で咎められたが、

提灯ちやうちんの用意よういはなし、お前まへさん。其その手てに持もつてる洋ラン燈ブをお點つけけなさい、と曳子ひきこは中ちゆうツ肝ばらだから口くちの裡うちで、
幾度いくたびも、へん間まが抜ぬけだな。

然るほどに神月梓は、暗夜、町中に灯した洋燈を
 持つて、荷車の前に立たせられて、天神下を彼處此
 處、角の酒屋では伺ひます、葎屋の店でも少々、米
 屋の窓でも一寸ものを。いづれも知らない、存じま
 せんな、を言はるゝ度、背後から、嚙着くやうに叱
 言をくツて、殆ど耐へ切れなくなると、雨が降出し
 た。

梓は蒼くなるまでに、果は氣を苛つて、額がつツ
 ばると思ふほどな癩癢筋、一體大人しく、人に逆ら
 はず、争はないだけ、いつもは殺して置く蟲がある
 のでむら／＼と、來た。其に氣が小さいから、取詰
 めて、持つてる洋燈を此の荷車に叩きつけよう、そ
 して粉微塵に砕けたら、石油に火が移つてめら／＼
 と燃えて無くなるであらうとまで思った。これは爲
 かねない少年であつた。

爾時、黒縮緬の一ツ紋。お召の平生着に桃色の卷
 つけ帯、衣紋ゆるやかにぞろりとして、中ぐりの駒

下げた、高いので丈もすらりと見え、洗髪で、濡手拭、
紅絹の糠袋を口に銜へて、鬢の毛を搔上げながら、
瀧の湯とある、女の戸を、からりと出たのは、蝶吉
で、仲之町から何處にか住替へようとして、暫くこ
の近所にある知己の口入宿に遊んで居た。年紀十七
の夏のはじめ、春の名残に降らうとする大雨の前で、
戸外は眞暗な出會頭。蝙蝠が一羽ひら／＼と地を低
くう飛んだと見た、早や戸を閉めた繩暖簾を洩れて
二筋三筋戸外にさす灯の色も沈んだ米屋を背後に、
此方を向いて悄然洋燈を手にしてゐる一個白面
の少年を見たのである。梓其時は其の美しい眉も逆
釣ツて居たであらう。將に洋燈を取つて車の臺に抛
むとする、眦の下つたのは蝮より嫌な江戸ッ兒肌。
人見知をせず、年は若し、かけかまひのない女であ
るから、癩癩が高ぶつて血も逆らむとする、若い品
の良いのを見て嬉しくツて耐らず、様子を悟つて聲
を懸けた。

(一寸何處へ行らつしやるの、)
一幅の赤い灯が、暗夜を劃して閃くなかに、がら
くたの堆い荷車と、曳子の黒い姿を従へて立つて居

たのが、洋燈ラムプを持つたまゝ前まへへ出でて、

（家うちを探さがしてゐるんです。） と内心ないしんに激げきしたれば
聲こゑも鋭すまじく答こたへたのである。

蝶吉てふきちは莞爾にこ々々しながら、愛想あいそよく仔細しさいを尋たづねて、
（然さう、今日けふお引越ひっこしなすつたの、何なんでせう、兵兒へこお
帶びをして、前垂まへだれを懸かけた、肥ふとつた旦那だんなと、襟えりのかゝ
つた素袷すあはせで、器量きりやうの可いいかみさんとが居ゐる内うちでせう。
然さうなの、其それぢやあつあつあい其處そこなんだわ。） といつ
て、濡手拭ぬれてぬぐひで指ゆびさしをしてくれた。蝶吉てふきちは其その長屋ながやの表おもて
通とほりの口入宿くちいれやどに居ゐたのであつた。

此この口入宿くちいれやどの隣家となりは、小ちひさな鹽煎餅屋しほせんべいやで、合角あひかどの
花簪はなかんざしを内職ないしょくにする表長屋おもてながやとの間あひだに露地ろぢがある。其處そこ
を入はいると突當つきあたりが黒板塀くろいたべい。ついで右みぎへ廻まはると粹いきな格子かうし
戸どの内うちに御神燈ごしんととうを釣つるしたのがああるが、ああらず、左ひだりへ
向むかふと、いきなり縁側えんがはになつて、奥おくの石垣いしがきが見透みとほさ
れる板屋根いたやねの小家こいへがある、其處そこが引越先ひきこしさきであつた。

此この一廓くわくは、柳やなぎにかくれ、松まつが枝えに隔へだてられ、大おほ

屋根の陰になり、建連る二階家に遮られて、男坂の上からも見えず、矢場が取拂はれて後、鐵欄干から瞰下しても、直ぐ目の下であるのに、一棟の屋根も見えない、天神下のかくれ里。

系が
描ける幻
まぼろし

二十三

扱て件の花簪屋と煎餅屋との間の露地口の木戸は、
おしめ、古下駄等、汚物洗ふべからずの總井戸と一
般、差配様お取極で、紙屑拾不可入、午後十時堅く
切。

梓が引越してから五日目の夜、十時を過ぎて歸る
ことがあつた。木戸へ來ると、鍵がかゝつて居た。
向うの湯屋では板の間を磨る音、男坂下なる心城院
の門も閉つて、柳の影も暗く、あたりは寐て、切通
の方には矢聲高く、腕車の疾軋るのが聞えたが、重
寶なもので、煎餅屋の店から裏長屋へ抜けられるの
だから、木戸を閉切つたあとはこれが例。女房が見
つけて、ちやんと心得、（書生さんの旦那、お穿
物をお提げなすつて、此方から。）と言つてくれ
た。

極も悪し、面を背けて店口から奥へ抜けようとす

ると、同く駒下駄を手に提げて裏口から入つて来た。前日の美人とばつたり逢つた。袖も摺合ふばかり敷居で行違ふ。振の明から溢れる緋の長襦袢が梓の手にちら／＼と搦むばかり、颯とする留南木の薫。顔を見合せて、

(失禮、)

()

(些とお遊に入らつしやいな。) と言ひ棄て、それでも未だ答をしない中に、早やばた／＼と戸外へ出たが、

(おばさん、お邪魔様、) と言ひざまに口入宿の表の戸ぐわら／＼、鈴を鳴らして入つた。蝶吉は今夜裏なる常盤津の師匠の許に遊びに行つた歸であつた。

梓は幾ほどもなく佛文の手紙を得て、此の隠家を出て、再び寄宿舎の卓子にバイロンの詩集を繙いて肅然とする身になつたが、固より可懐しい天神下は益々床しいものと成り増つたのである。

今こそあれ、件の美人を梓は誰なりと知る由なく、

唯彼の時と、其の時と再度のみ。其もつく／＼見た
のではないから、年紀のほども顔立も能くは分らな
かつたけれども、唯彼が風俗は一目見て素人でない
ことを知つた。宛たる此の大都の藝妓の風俗、梓は
ぞつとしたのである。

然も窮苦極りなきに際して家を教へられたのであ
るから、事は小なりと雖も梓は大なる恩人の如くに
感じた。感ずるあまり、梓は亡母が假に姿を現して
自分を救つたのであらうと思つた。敢て爰に更めて
いふ、梓の母は藝妓であつた。そして天神下は其の
生れた處である。

幾多の星霜を経ては居るけれども、彼處に柳、此
處の松、湯屋も古くからあるといふし、寺の門前の
は今もあたりの女の子が、打集うては遊んで居る、
鞠唄も唄うて居る、廂、軒、土の色も、有の儘。是
がむかし母親の住んだ家ではないかと心の迷ふのも
慕しさの餘、暫く住んで居た、破屋の太く古いのに
就けても、もしやそれかと、梓は恰も幻といふもの
を畫に描いて、目に是を見るやうな思がした。それ

これの聯想から、誰とも知らず、其頃の蝶吉を、母の俤に肖たふうに思つてた折から、煎餅屋の店で行違つた時も、母が恰も其の年紀で、其頃、同じことを、此處でして、慙うして育つたのであらうと、恰も前世紀の活きた映畫に接するが如く感じたのである。

梓が大學の業を卒へて、佛文の手紙の姫、年紀は二ツ上の龍子に迎へられて、子爵の家を嗣ぐ頃には、地主の交替か、家主の都合か、彼の隱家の木戸は釘附の切となつて、古家の俤も憇れなくなつた。構外を廻つて見ると、今までとは方面の違つた町の側、酒屋の藏の廂合に一條仄暗い露地が開かれた。大方其處から舊の借家へ通ずることが出来るのであらうと思ふばかり、いふまでもなく、先に世話になつた友人夫婦は、疾くに引越して行方知れず、用もない處、殊に、向合つて御膳を食べる、窓から手を出して、醬油を借りようといふ狭い露地内へ、紋着の羽織でうそ／＼入られたものではない。入つて見られず、伺うて分らなくなると、益々可懐しさは増つたけれども、是までと違つて玉司子爵梓氏となつてからは、邸を出入の送迎も仰々しく、往來の人の目にも着く、湯島のそゞろ歩行は次第に日を措き、週を隔つるやうになつたが、遠いが花の香で、床しさは

またひとしほ
又一入。

梓あづなは其その感情かんじやうを以もつて、其その土地とちで、然しかも湯島詣ゆしまうでの朝あした、御手洗みたらしの前まへで、桔梗連きくやつれんの、若葉わかばと、幟のぼりと、杜鵑ほととぎすの句合くあはせの掛行燈かけあんどう。雲くもが切きれて、梢こすゑに残月ざんげつの墨繪すみゑの新あたしい、曙あひぼのに、蝶吉てふきちに再會さいくわいしたのである。

今日けふしも寄宿舎きしゆくしやの紅茶會こうちやくわいで、龍田若吉たつたわかきちが言いつた如ごとく、梓あづなは其時そのときも一意あるいみ味みを以もつて、蝶吉てふきちに助たすけられた。

些ささい細いなことだけれども、一體たい貧窮刻苦ひんきうこくくの中なかに育そだつた人の、文學士ぶんがくしで玉司子爵夫人たまつかさしやくふじんの戀婿こひむこでありながら、些ちつとも小遣こづかひなどは氣きにしないので、持もつて來きたとも覺おぼえず、忘わすれて來きたとも知しらず、落おとしたのか、紙入かみいれといふものを持合もちあはさず、水みづを注すくがうとして干杓ひしやくを取とると、

(水錢みづせんをおくんな。) と豆まめを裝もつてならべてある土器かはらけの蔭かげから、丸々まる／＼ツちい、幼をさない顔かほを出だされて、懷ふところを探さぐるとない。袂たもとに手てを入いれるとない。左ひだりにもない、帶おびの間あひだには固もよりない。

思はず、どぎまぎして呷いた。

（何うした知らん。）

（水錢をおくんな。）

梓は極が悪いので、

（おや、おや。）と疑はしさうに言つたけれ

ども、一種の見得で、自分には掏られたあてもないのである。

子供は同じことを、

（水錢をおくんな。）

（まあ、懷中を忘れたさうだよ。）

目をぱちくりして、委細構はず、

（水錢をおくんな。）

たゞ六ツばかりの小兒に對しても、梓は性としてこれには顔を赧くして、立場なく後へ退らうとする。背後に立つたのが、朝參の婀娜たる美人で、罪もななく莞爾々々しながら、繻子の不斷帶の間がら、臆りと懷紙に包んだ紙入を抜いて取り、掌に擴げて緋地の襪褸錦の紙入を開いた中から、指で環を拵へたや

うな、小さな玩弄の緑の天鵝絨の墓口を引出して、
パチンとあけて、幼児が袂の中を覗くやうに、あど
けなく、嬉しさうに、ぱつちりした目を細めで見な
がら、一片の、銀の小粒を、キラリと撮んで、向う
へ投げた。

（小僧さん、旦那様の分もあるんだよ。）

梓は屹となつた。

美人は顧みて嫣然として、

（あなたや、さあ、手をお出しなさいな。）

梓はこゝに到つて、胸中先づ後の謝恩を決しながら、
衝と差出した、醫師の如く、爾く綺麗な手に、
一杯の清水、恰も珠の如きを灌いで、颯と砕けると
更に灌いだ、雫も切らせず、

（私を使つて下さらなくツて。）と落着いて、
静に秋波に視ていひながら、一寸、仰向いて
端を引いた、奉納の手拭、未だ手摺もなく新しい。

茶色の地に、白で抜いて、數寄屋町、大和屋内

―― てふ吉 ー ー とある。

（姐さん、屹度お禮をする、） と梓は心を籠めてはじめていつた。

（あら、何ですよ、）

（いゝえ、） と押へて、其まゝ別れて敷石の上を渡つた。額堂の軒、宮の廂、鳥居の下、御手洗の屋根に留まつた鳩が、あちら此方しばゝ鳴いて、二三羽、二人が間をはらゝと飛交はした。納豆々々の聲遙に、人はあたりになかつたのである。 ー

此間二年餘相たち申候。歌枕の今夜の逢曳。

二十五

「一寸今夜は私嬉しいわねえ、此間から鹽梅が悪くツて、其上お前さんは久しくおいでなさらなしいし、鬱いばかり居たんですよ。」と急に又しめやかになつた。氣の變ることの極めて早い、寧ろ鋭いといつても可い。此女の心は美しく、磨いた鏡のやうなものであらう、月、花、鶯、蜀魂、來つて姿を宿すものが、ありのまゝ色に出るのである。

梓も可懷げに頷いて、

「つい些とばかり忙しかつたもんだから、病氣とは聞いて居たけれど。」

「精出して勉強をして居たんですか。」

「あゝ、」と何氣なく答へたが弗と氣に懸つた様子で浮かぬ顔をした。

蝶吉は素より何の氣もつかないので、

「然う、生意氣だねえ。」

「失禮な、人が勉強してるといふのに、生意氣だといふことがあるものか。」

「あなたや、馬車に乗らうと、いふんぢやあなし、詰らなくツてよ。又煩ひでもすると悪いもの。」

「だつて怠けてちやあ食べられませんかから、」

「私が達引くから可いわ、」といつて蝶吉は仇氣ない顔に極めて老實な色を装つた。梓はこれを聞いて、何か氣がさしたやうな様子であつたが、笑に紛らして、

「何うぞ宜しく、」

「えゝ、それはもうね。」

「然し、私は駒下駄ぢやあ厭なんだ。」と思ひ切つたといふ語氣で冷かにいつて、屹と蝶吉を見た、目の中には一種の思を籠めたのである。

蝶吉は然も思ひ懸けなかつたらしかつた。

「おや、おや、異なことを、」といつて、澄し

たもの。

梓はこゝに至つて居住を直した。

「いゝえ、異なることをいふんぢやあない、隠し立てをされてはをかしくないよ、お前、松の鮓は一體何うしたんだえ、」とさすがに問ひ兼ねて當らず障らず。

「厭よ、やくのかい、貴方氣に懸けるやうな對手ぢやあなくツてよう、初心らしいことをいつて、可笑しいわねえ。」

「何しろ、全くか。」

「はあ、」と極り惡げに男と見合つてた顔の筋を動して、

「それはあの、何なの、だつて私は何にも知らないんですもの、」と俯向いて膝の上を、煙管で無意識に敲いながら

「だつてもう其限何だつて那奴は何だらう、其を氣に懸けて下さるのは、餘り可哀さうよ、蝶吉ぢやあゝりませんか。」といつて自らたゆげに見えて微笑んだ。

「其事ぢやあないよ、お腹の
いひかけて、梓は我ながら面を背けた。」と

「まあ、」

黙つて、俯向いて暫くして、蝶吉は顔を赧らめ、
「貴方、誰に聞いて来て、よう何處から知れたの
よ。」

「何少しばかり氣になることを途で聞いたもんだ
から、つい、」

「もつとまだ其の上を知つてるんですか、」
蝶吉は驚いたやうな聲。

「悪く思つてくれちやあ困るよ、僕はね、知つて通、遊ぶのはお前がはじめてだ。商賣だから嘘を吐くもんだと思つて居ただけれども、お前が見つともない、縦令うそにでも好いたとか、何とかいつて、さうして好いた眞似をして見せる分には、好かれた者に違ひはないのだから、好かれたんだと思つておいでなされば可い。いやに疑るのは見つともない、男らしくもない、と然ういふから、成程然うだと、自分極で、好かれてると思つてる。あゝ、ずつと惚れられたんだと思つて、これでも色男に成濟して居るんだ。だから、何も洗ひ立をして、何うの、恚うのと、詮議立をするんぢやあないけれども、今来る途中で、松の鮨が、妙なことをいつて當つ擦つたよ。」

「厭だ！」

蝶吉は閨を透見したものを、辱しめ、且つ自分のしどけなかつたのを愧づる如き、荒ツぱい調子であつたが、又自ら危んで、罪の宣告を促して弱々しく、

「何か言つてみましたか。」

「残らず、」と神月はきつぱり言つた。

「へい、」と眞面目に、蝶吉は忽ち三ツばかりものゝ言ひざまに年紀を取つたが、急に氣を換へて、

「だつて、すっかり快くなつてよ。西洋ぢやあ皆平氣ですつて。また田舎なんぞには當前だと思つてますとさ、私もうさつぱりしたんです。」

體にも障らなかつたといつて、今夜ねえ、床上げやら、何やらで、内の姐さんが赤飯を炊いてくれました。而して一杯飲んだんですもの、祝つた位ぢやあゝりませんか、不可くツて、え、え？」

蝶吉は梓が何か易からぬ面色があるのを見て、怪しむ様子。

梓は急に語も出でず腕を拱いて默然として居た。

「よう、何を鬱ぐのよ、私のことなんですか、不可くツて、」

「可いも悪いもお前、」言語道斷だ。

「だつて爲方がないぢやあゝりませんか、」と

詮方なげに蝶吉はぱつちりした目を細うして、下目
使ひで莞爾したが、顔を上げてまじくりして、

「尤も何なのよ。一度那樣ことをしたものは、も
う／＼一生子供は出来ないツていふのよ。ですけれ
ども、貴方嬰兒は入らないんでせう、ぎやあ／＼泣
いて可煩いから大嫌だつて言つたぢやあゝりません
か。ですもの、三ツばかりの兒が、父さん、母さん
ツて、生意氣な口を利くのが可愛いんですから、餘
所から貰ふことにでもしませうツていつたら、それ
さへ面倒だ、可愛い口を利かせるなら鸚鵡を飼へば
澤山だツて言つたんですもの。」

梓呆れ果てゝ言葉なし。

蝶吉は有爲顔で、

「ほら、御覽なさいな、可いぢやあゝりませんか、
私も嬰兒なんか欲しくないんですから、」
と言ひ懸けて少し體を斜にして、秋波で男を見な
がら指示すが如く、其の胸に手を當てた。

「此方のお乳をお菜にして、此方の大い方をお飯
にして食べるんだつて、」とぐツと緊め附けて肩
を窄め、笑顔で身顫をして、
「厭、痛いわ！」

梓は耐りかねて、

「お蝶、」と些と鋭くいふと、いつも叱るのを外らかす傳で、蝶吉は三指を支いて的面に潰し島田に奴元結を懸けた洗髪の艶かなのを見せて、俯向けに畏り、

「召しましたは何か御用にござりまするな。」
と男の假聲を造つて、笑ひたさを切なく耐へる風情。餘りのことに氣の弱い梓は胸が充満、女が見ないの
で心の張が弛んだか、瞞めて居る目にほろりとした。
が、思切つて、衝と寄つた、膝を膝に突掛けて、肩
に手を懸けるとうつつかりした處を不意に抱起されて、
呆れるのを、熟と瞞め、

「可哀さうだな、お前は不幸に生れて来て、何にも世の中の事といふものが分らないんだから、私は何にも咎めやしない。譬ひ此處で、目の前で、やあい、欺して遣つた、二本棒め、殺を言やあ嬉しがつ

て、色男が聞いて呆れる、様あ見やがれと、愛想盡を言つて舌を出した處で、些とも肚を立てはしない。

否、譬ひ悔しくツて、肚は立つても、お前を不人情だとも何ともいはないよ。

恚うすりや薄情だ、不人情だと思つてされてこそ、癩だけれども、些とも知らないで言ふことなり、爲ることなら、不都合でも何でもなからう。

だから、何にも言はないが、其の何だよ。お前は僕のことを初心だ、坊ちゃんだ、何にも知らないといふさうだ。勿論三が下るものやら二が上るものやら、節は伸すもんだか縮めるもんだか、少しも知らない。通だとか粹だとかいふことは、からも、んぢいで分らないけれども、意氣だといつて、此の寒中、綿の入らない着物を着て居りや、體に毒だといふことは知つてるんだ。そして又此處等の藝妓は綿のはひつたものを引摺つてるといつて、お前の豪がることも知つて居る。

成程薄着ですらりとして、そりや姿は可いだらう。
ものが間違つて、馬鹿げて居て、仇氣ないのが可い
として、故とさへ他愛ないことをいふやうに爲込ま
れる位ださうだつてな、字引と首ツ引で、四角い字、
難かしい理屈ばかり聞いてた耳に、お前が、譯の分
らない、他愛のない、仇氣ない、罪のないことを言
つてくれるのが嬉しかった。何面白かつたんだ、面
白いといやあ慰だ。それが段々嬉しくなつて、可愛
らしくもなり、つい慙云ふことにもなつたんだが、
他愛なさも、仇氣なさも、お肚を 可い
かい、政府へ知れりや罪人だぜ。人にやあ交際も出
来ないやうなことをしながら、赤飯を食べさせられ
て、酔つて来るやうになりや澤山だ。」とひそ／
＼ながら聲と共に手に力が入つたので、蝶吉は赧ら
む顔を外しもならず、呼吸を引くやうに脣を動かして
居る。

様子を見守り、

「可哀さうに、決して、それを責めるのぢやあな
い。曩も言ふ通、お前がお前だから何とも思ひはし
ないけれど、お前は十九で、私は二十五。七ツ違ひ

の兄^{にい}さんだ。まあ、妹^{いもうと}だと思^{おも}つていふから聞^ききな。」

下かた

二十八

然ればぞ思ひ當る。一月ばかり前の夜、同じ此の歌枕で會つた時、蝶吉はそれとはなく、頻に子が一人欲しくはないかといつたのを、氣にも留めないで聞棄にしたが、松の鮨の毒口を、此處で聞正せば實際で、梓は思ひ懸けず、且つ驚き且つ呆れ、あはれにも情なくも思つたのである。

梓は嘗て、蝶吉の仇氣ない口から、汐干に行つて、騒ぎ歩いて、水を飲んだ、海水は鹽ツばいといふことを、然も大なる學理を發見した如くにいふのを聞かせられた。

子供の中惡戯をして叱られると、内を駈出して、近所の馬鹿囃子の中へ紛込んで、チャノ、チャツチキツツチツと躍つて居ると、追駈けて來た者が分らないで黙つて見遁しては歸つたが、私の顔は今でもおかめの面に肖て居るかといつて、尋ねられたこと

もある。

其氣であるから、蝶吉がおもてを歩いて、生意氣だと思ふ奴には突當つて遣るといふから、何を弱蟲、先方が怒つたら何うするといつて寤めれば、打たれさうになつたら二十五座へ紛込んで、馬鹿離子を躍つてよ、と眞面目でいふのだから耐ない。まさかに今十九にもなつて、然うとは信じもすまいけれども、口でいふやうな幼心は、今も猶残つて居る。墮胎をしたものは刑法の罪人だといへば、何の事が固より分らず、お前巡査に捕つて牢へ入れられなけりやならないといへば、又二十五座へ遁込んで躍るといふであらう、手のつけられたものではない。

然までに世の中の事といふものが分らない生立が、馴染むに従つて知れゝば知れるほど、梓は愛憐の情の深きを加へた。

然らぬだに蝶吉は恩人である。殊に懷舊の情に堪へざる湯島の記念がある上に、今は或者は死し、或者は行方の知れない、もの心を覺えてから、可憐しい、戀しい、いとほしい、嬉しい情を支配された、

従姉妹や姉に對する總ての思を、境遇の齊しい一個蝶吉の上に綜合して、其の情の焦點を聚めて居るのであるから身にかへても不便でならぬ。

況して打明けた蝶吉の身の上を悉しく知つてからは、謂ふべからざる同情の感に打たれたのである。梓は何となくよく似た身の上だと思つた。

蝶吉の母親は舊京都の然るべき商賈の娘であつたが、よくある、淨瑠璃の文句にある、親々の思ひも寄らぬ夫定めで、言ひ交した土佐の浪人と未だ江戸である頃遁げて來た。二人で根岸に隠れて居る中、時世といひ、活計を失つて、仲之町の歌妓となつた、且つ勤め、且つ夫に情を立て、根岸に通つて居る内に、蝶吉は出來たので。

子持の母も藝で通り、馴染の座敷では小女が連れ來ると、背後を向いて、三味線を下に置いて、懷を開けて乳房を含ませるといふ境遇であつたが、誕生を濟して、蝶吉が漸く立つて歩くやうになると、根岸では、父が病の床に倒れたが又起たなくなつた。

越こえて三みつ歳ゝになる時とき、母は親おやは蠣かき殻がら町ちやうの鼻ひ肩い客きやくに、
連つれ兒こは承しや知うちの上うへ落ひ籍かされて、濱はま町ちやうに妾せふ宅たくを構かまへると、
二ねん年が間あひだ蝶て吉きちは、乳おん母は日ひ傘がさで、かあちゃん、かあち
やんと言いへるやうになつた。

其も暫く、米屋町は米の上り下りで人間の相場が狂ひ、妾宅の主人は大失敗で、落魄して、最後に一旗といふ資本がないので、心まで淋しくなり、蝶吉の母に迫つて、其の落籍したゞけの金員耳を揃へて返せといふ。

蝶吉の母は根岸の情人が亡なつてから、世を味氣なく、身を唯運命に任せて居たので、いふことに逆らはず、芳町から再勤したが、足りない金子は、家を賣つて、其でもまだ償はれなかつたので、蝶吉を仲之町の大坂屋といふのに預けた、年期が十三年。

廓の抱妓の慣例として、色は屹と賣らさぬ代り、藝事にかけては如何なる手段をもつて仕込んでも差支へはない、少々痛いおもひをさせてもといふ口約束をしたのであるから、其のせたげやうと云方外な。

座敷は三人が一组、姉株の藝妓が二人、是に蝶吉

が、下方したかたを持つて跟ついて行くのであつた、といつて、いつか雪ゆきの降ふる夜よ、身みの毛けを悚よだ立て、梓あづきに其頃そのころの難なん苦くを語かたつたことがある。

座敷ざしきがある客きやくはといふと、彼あの土地とちでは夜よが更ふけてからのが多い。夫それといふ聲こゑが懸かると、手取てとり早く二ふた人の姉分あねぶんの座敷着ざしきぎを、背負揚しょひあげ、扱しごき帯おび、帯留おびどめから長襦ながじゆ袢ばんの紐ひもまで順序じゆんじゆよく揃そろてちやんと出だして、自分じぶんが着き換かると、其手そのてで二人分ふたりぶんの穿物はきものを揃そろへて、三味線しゃみせんを――其頃腕達者そのころうでたつしげしあねえ烈姉りやくは、客きやくの前まへで弾切ひきると絲いとを掛かけてる中うちも間まが抜ぬけるといつて、伊達だてに換かへ三味線しゃみせんを持つたので――四張しやう。呼よばれた青樓うちの帳場ちやうばまで運はこんで置おいて、息いきを切きつて引返ひきかへす、兩手りやうてに下方したかたを持つて駈着かけつける。

それから四張しやうの三味線しゃみせんを座敷ざしきに運はこんで、調子てうしを合あせて、差置さしおくや否いなや、取とつて返かへして、自分じぶんが持もちの下した方かたの調しらへの緒ををメめる時分じぶんには、二人ふたり悠々いゆうと入はいつて來くる。穿物はきものの雪ゆきを落おして、片附かたつける間まも心こころが急せかれ、座敷ざしきへ上あるとお座附ざつきの濟すむ頃ころで、膝ひざに手てを置おく猶豫いうよもなく、それ下方したかたといつて責せめられるが、指ゆびの皮かはが

破れてる上に冷たくツて手がゝじかむ。息が切れて、
もう小鼓を肩に振懸ける力もない。

是を梓に言つた時、蝶吉は床から出て、友染夜具
の袖を敷いたと見ると、長襦袢のまゝ片膝を立てた。
其上に手を翳して、

（私小さくツてこれんばかりだつたんですもの、
鼓ばかりで體が何處にあるか分らなかつたの。）
と、いひつゝ片手を肩に懸けて、小鼓を構へる姿吃
と直つた。鬢の毛ははらり／＼と其の雪のやうな素
顔に亂れたが、往時を追懐する目も据つて、いふい
べからざる悲哀の色を浮べたので、梓は思はず寢衣
の襟を正して起きた。

とんと打入れる發奮をくツて、腰も据らず、仰向
に引くりかへることがある、えゝだらしがない、尻
から焼火箸を刺通して、疊の縁に突立てゝ遣らう、
轉ばない呪禁にと、陰では口汚く罵られて、歸ると
耳を引張つて掌で横すつぼう。襟首を取つて伏せて、
長煙管で背を擲はすといふ仕置。唯其の粗忽があつ

た時ときばかりではなく、着物きものを疊たぐんで背筋せすぢを曲まげたと
言いつては折檻せつかん、踊をどりがまづいといつては打ぶたれて、體からだ
に生疵まきずの絶間たえまもないのに、寒さむさは骨ほねを通とほすやうなあ
け方がたまでも追廻おひまはされて、二人ふたりが歸かへると、着物きものから三
味線みせん、下駄げたのあと始末しまつ、夜よが明あけると帳面ちやうめんをさげて、
青樓ちやうを廻まはらせられるので、寢ねる間まといつてもおち/
ない。

晝は晝で、笛やら、太鼓やら、踊の稽古、手習も一日置で、ほつといふ間もなかつたのである。

うる覺えに實の母親は知つて居たけれども、年も分らねば所も知らず、泣けば舌の尖を捻ぢられるから、ほろ／＼、涙を流しては、といった、蝶吉は其時、崩折れて涙を拂つた。

土手など通ると、餘所の兒が母親に手を曳かれて行くのを見たり、面白さうに遊んで居るのを見る度に、同じ人間が何故だらうと、思はぬ時といつてはない。一時も、田圃のちよろ／＼水で、五六人、目を高を掬つて居るのを見ると、可羨しさが耐へられなから、前後も辨へず、裾を引上げて、袂を結へて、私も遊ばして下さいな、といつて流に入つた。やい、賣婦め、お玉杓子め、汚らはしい！ と二三人、手足を取仰向に引くりかへしたので、泥水を飲んで眞蒼になつて歸ると、何條之を許すべき、突然細紐でぐる／＼巻、濡しよびれたまゝ高い押入の中に突込

まれた。半日と其夜の夜中二時頃まで、死んだものゝやうになつてる中に、私ばかり、情ないものを、辛いものを、慰めてこそくれずとも、賣婦だといつて突轉がした町の奴等。

内で藝事をせたいげものも、皆手前達が甘やかされて、可愛がられて、風にもあてず育てられた、其ほどの果報にも飽き足らず、にきびの出る時分には其の親に泣を見せて、金を掴んで、女をもてあそびに來せるためだ。蹴飛ばして遣らう、おのれ、見返して遣らう、おのれ誑して遣らう、翯つて遣らう、死ぬやうな目にあはして遣らう。泡を吹かせずに置くものかと、それから氣に張が出て、稽古事も自分で進み、人には負けぬ氣で苦勞も氣にせず、十七の年紀まで遣り通したが、堅い荅も花になつて、もうあとへ、自分を姉さんといつて冊くのが出來て、秋の仁和賀にも引を取らず、座敷へ出ても押されぬ一本、地は清元で、振は花柳の免許を取り、生疵で鍛へ上げて、藝にかけたなら何でもよし、客を殺す言句まで習ひ上げた蝶吉だ、さあ來い！

花も見、月も見る癖に、活きた女を慰まうとする畜生等、目にも物を見せて遣らう、簪の先が尖つてゐるから、憎まれて怨まれて、殺されさうになつたらば、對手の目球を突潰して、體だけ逃げれば可いと、柳眉星眼火焰の唇。満腔の不平を湛へて、却つて嬌然として天の一方を睨むやうになり得ると、這は如何に、薄汚い、耳の遠い、目の赤い、襷褌を纏つた婆さんが杖に縋つて、よぼ／＼と尋ねて来て、生の母親が大病である、今生で唯た一目、名残が惜みたいといふ口上。

夢にも逢ひたい母様と、取詰めて手も足も震ふ身を、其の婆さんと別仕立の乗合腕車。小石川指ヶ谷町の貧乏長屋へ駈着けて、我にも非ず縋りついた。母様、峰（幼名、）か、と嬉しさのあまり、呼吸の下で聲も出た。母親は其日絶えなむとする玉の緒を蝶吉の手に繋ぎ留められて、一度は目を開いたが。

一目見廻した様子でも、醫師はいふまでもないこと、風薬の手當も出来ないと見て取つて、何は措いて、蝶吉は一先づ大坂家に歸つて、後の年期も少い

ので、上借うはがりをして貢みついだけれども、半日はんいちもまゝならぬ抱妓かへの身み。看病人かんびやうにんを頼たのむのも、醫者いしやを心付こころづけるのも、北里きたと、小石川こいしかはの及腰およびこし、瘡細やせほそるばかり鹽氣しほけを斷たつて、生命いのちを縮ちぢめてもと念ねんじ明あかした。

七日目の朝、漸うのことで抱主から半日の暇を許され、再び母親を小石川の荒屋に見舞ふと、三日が間、夜も晝も差込み通し、鳩尾の處へぐつと上げた握掌ほどのものが、上へも下へも通らぬので、唇の色も紫になつて居たのが、蝶吉の手で擦られると、恩愛の情に和げられて、すや／＼と寝ることが出来た。三時間ばかり経つと、病苦も忘れたやうになり括枕に胸を壓へて起上つた時、蝶吉は生れて以來、しみ／＼顔を見たのである。

（よく紀の國屋に肖て居てよ。》
 一
 と蝶吉が然う云ふ顔立、母親は名を絹といつた。

娘を大坂屋に預けて、其の身葎町で弘めをしてから、ぢみちに稼ぎ稼ぎ借金をなし崩し、凡そ五年ばかりで身脱をした、其間に世話をするものがあつて、自前になつて御神燈を出したが、可い抱妓の一人も

置いて遣らう、と言ふものがあつたけれども、母親
はこれを己に鑑み、譬ひ然うして所得が有つて身代
が出来た處で、汚れた金で蝶吉を救出しては、屹と
末がよくあるまい。又二度の勤をして益々深みへ落
ちやうも知れず、固より抱妓を置く金で仲之町から
引取つて手許で稼がせる數ではなし。然ればといつ
て人の深切も、有繫に娘を落籍してくれるまでには
到らなかつたが、女腕で一人を過す片違に端金を積
立てゝも、なか／＼蝶吉の體は買取られぬ。たとへ
ば其が出来るにせよ、母は固より天道の大御心には
協はぬ生立、自分の體を牲にして、そして神佛の手
で、つまり幽冥の間に蝶吉の身を救つて遣らう、い
づれ母娘が、揃つて泥水稼業といふは、免れぬ前の
世の因縁づく。罪滅の爲だと思つて母親の持つた亭
主は――間黒源兵衛――渾名を狂犬といふ、
花川戸町の裏長屋に住む人入稼業、主に米屋の日傭
取を世話する親仁。

渡者を振廻して處々の米屋に稼がして置く、お絹
は其の貸錢を集めに廻つた。橋場今戸の居まはりは
云ふに及ばず、本所、下谷、飛離れて遠くは日本橋

あたりまでも、草履穿で駈ずり歩かねばならないの
みならず、煮るも、炊くも、水を汲むのも、雑巾が
けも、かよい人の一人を手業で、朝は暗い内に起
きねばならず、夜になるまで、足を曳摺つて、日雇
の賃錢を集めて、家に歸ると親仁の酒の酌をして、
灸の蓋を取換へて、肩腰を擦つて、枕に就かせて、
それから、歩を取つて、各々、二階に三人、店に五
人、入交りに泊に来る渡者の稼ぎ高に割當て、小
遣を遣つて、屋根代を入れさせる。此の算用を算盤
ばち／＼、五を引いて二が残り、唯た三厘の相違が
あつても髻を掴んで引摺倒さうといふ因業な旦那を
持つてるから、夜の更けるまで帳場に坐つて、其の
疲れ果て、吻と一息吐くと綿のやうになる體で、お
絹は添臥をしたのである。

何の！ 踊の稽古をしても、三味線の弟子を取つ
ても、我身一ツは安々と世間を清く過さるゝを、獄
に投ぜられて苦役に就いても、然ばかりにはあらず
と思ふ、殆ど生身を削り落すやうな難行をしたのは、
敢て墮地獄の我身の苦患を扶からうといふのではな
い、唯單に蝶吉の爲にしたのであつたと、母親が其

時^{とき}
の
物^{ものが}
語^{たり}
。

固より自ら進んでも、慙くは成るべき運命であつ
 たらうけれども、然までとは有繋に思ひ懸けなかつ
 た、積年の憂苦辛酸、一日の安き暇もないので、お
 絹は身も心も疲れ果て、其の一月ばかり前から煩
 ひ出し、床に就いて足腰の自由が利かなくなると、
 夫狂犬源兵衛は屋外に之を追出した。其を争ふ力も
 なくて、指す方もなく便つたのが、斯の耳の疎い目
 腐れの婆の家、此の年寄の兒は、嘗て米搗となつて
 源兵衛が手に懸つて、自然お絹の世話にもなつたが、
 不心得な、明巢覗で上げられて、今苦役中なので、
 其の以前から倅の縁で、お絹にも厚意を受けた。年
 寄は恩を忘れず家へ引取つて介抱をしては居るけれ
 ども、活計に窮するのはいふまでもない上に、耳が
 遠くツて用が足りず、水一杯といつても聞えない看
 護を請けるお絹の身になつたら何うであつたらう、
 又これを知りつゝも、一晚と附切つて介抱すること
 のならなかつた蝶吉の氣は甚麼であつた？ 人が神
 佛を怨むのは正に然云ふ時である。

そちこちする中、晝も過ぎたので、年寄はまめ／＼しく形ばかりの膳立をした、お菜が其時目刺に油揚げ。

（母さんが炊つて上げよう、）と、お絹は一世の思出。知死期は不思議のいゝ目を見せて、たよ／＼として火鉢に凭つた。夏近いが、寒いからと、年寄は危んで、背後から昆布のやうな蒲團を被せようとする、これぢやあ汚らしくツて折角の馳走も旨しうないと、取つて撥退けたので、蝶吉が心得て、被て居た羽織を脱いで着せた。

（ぢみなんですから母さん似合ひますよ、）と嬉しさうにいふ顔を視めながら、お絹は手を通しつゝ、振澤山な裏と表を熟と見て、

（峰ちゃん、生意氣なものを着てるね、》一といつた。故郷の京の色香に江戸の意氣張を持つて、仲之町でも、葎町でも、小さんといつて、立てられた蝶吉の母は年紀纒に三十三、最後の大厄で、其日の晩方、男は自分で見立てると言つて遺言して、日本

の男と女の中に、然も、廓の中に、蝶吉ばかりを
したのである。あと十日とは措かないで、小石川柳
町から丸山の窪地へ水が出た時、荷車が流れたのが、
根太へ打つかつて、床を壊すと、件の婆は溺れて死
んだ。是も葬る者がないので、蝶吉は母が臨終に世
話になつたのを恩として、同じ寺に葬つたのである。

印の墓石は未だ立てることは出来ないけれども、
出来る時だけは缺かさないで参詣する、梓がなかつ
た以前は、唯其の墓に取継ることばかりが此上もな
い樂みであつた。

蝶吉は其の亡きお絹の引合せだと信じて居る梓に、
いつの晩か手を開いて見せた。指の先が色に染まつ
て、赤くなつて血が浸んだやうなのを怪んで聞くと、
今日お墓参りをした時濡れ手で線香を持つたといつ
て、

（私母さんと御膳を食べたのは生れてから唯た
一度なんですもの、）と継り着いて泣いた。其の
手が冷たかつたから、梓は思はず、しつかと胸に抱

いたのである。

（お宗旨は何だ。）

（知りません。）

（問へば可いぢやあないか。）

だつて可笑しいわ。）

（ぢやあ何てツて拝むんだな。）

（一生懸命になむ南無阿彌陀佛。）

此の女が、此の體で、此の姿で、唯一人墓の前に

泣くのだと思つて、梓は抱いたまゝ放さなかつた。

「よ、何うして其が見棄てられるものか、まだ其上に蝶吉は子供の時から、怨と、僻と憤とを以て見た世に對して、謂はゞ復讐的に己が腕で幾多遊治郎を活殺して、其の肉を啖ひ、其の血を嘗むることを以て、精魂の痛苦を癒さうとしたが、恰も母の死に逢つて志を果さず、未だ一度も男に向つて、誑すの黻るのといふは固より、お世辭一ツ言はずに居た身を以て、之を梓に獻じたのである。譬へば、其家は壊たれ、其樹は伐られ、其海は干され、其山は崩され、其民は屠られ、其女は姦せられた亡國の公主にして、復讐の企圖を懷いて、薪膽の苦を嘗め盡したのが、張も忘れ、意氣地も棄て、却つて我に哀を講ひ、一片の同情を求むるのである。天下また恚の如く憐むべく悼むべきものはあるまい。何として其が見棄てられよう。蝶吉は殘少になつた年期に借り足して、母親を見送つてからは、世に便なく、心細さの餘、些と棄身になつて、日頃から少しは飲けた口の益々酒量を増して、一時も青樓の座敷で酔つた歸りに、夜更けて京町の夜露の上に寢倒れた。月が射

して、其肉は蒼く、其骨は白く見ゆるまで、冷えて霜を浴びたやうになつてたのを、往來の仕事師が見付けて、大坂屋へ抱へ込むと、氣が付いたが、急に胸前へ差込が來てから、持病になつて、三日置位には苦悶える、最後にはあまり苦痛が烈しいので、くひしばつても悲鳴が洩れて、疊を搔むしつて轉げ廻るのを、可煩いと、抱主が手足を縛つて、口に手拭を捻込んだ上、氣つけだと言つて、足袋を脱がせて、足の拇指の間へ續け様に灸を据ゑた。妙齡になつてから、火ぶくれの痕は、今も鮮明に残つてると、蝶吉は口惜しさうに、母親に甘える如く、肩を振つて、浴衣に搦んで足を揃へて、小さい爪尖を見せながら、目に涙を浮べた其目で、待合の襖の紙が蟹のやうな形に破れてゐるのを見付けると延した足の拇指を曲げて、件の破目を、

(繕つたら可さうなものね、何だい、何だい、) と叱るやうにいつて抉るのを、

(馬鹿な、) と叱りつける梓の顔鼻を詰らせながら、涙の目で、蝶吉は嬉しさうに瞶めて居た。

其をも梓は忘れはせぬ。那樣他愛のない、取留のない、然も便りのない孤児に、唯一筋に頼らるゝ、梓は何うして棄てられよう。

蝶吉は彼時無慙なる介抱をした抱主の處置に平なること能はず、壓へ切れない蟲は突走つて、さてこそ天神下の口入宿へ來たのであつた。柳橋か、葭町かと行先を選んでゐる中に、内々勧めるものがあつた。之は天下の秘密だけれども、髮結が一人、お針が二人、料理人が一人、醫師が一人、女を十二人選んで、世話役が三人之を頭取が率ゐてパリイとかシカゴとかいふ處の、博覽會へ日本の女を見せに行く。場所も薔薇の花の盛な中へ取つて、朱塗の埒も結つてある、日給は一日三圓、十月の約束で何うだといふ。何の道東京で死んだ處で、誰一人然うかとも言てくれない體だからと、既に觀世物になる處、湯屋の前で弗と見た様に未練が残つたので、漸う獸に樂まれるだけ助かつたのである。其話をする時も、蝶吉は坐つたまゝ、大手を振つて、

（恚う遣つて威張つて見せて遣らうと思つたの

よ。

梓は餘りのことに吹出して、

(シヤモの牝はこれでございと言やあしないか、)

(先づね、) と莞爾した暢氣さ加減、淺はかさも程があつた。

(僕が附いて居ない日には、お蝶、お前甚麼目に逢はうも知れぬ、) と梓は息を吐きもあへず、

「それさへ見棄て、別れなければならぬやうな、兒を墮すなどいふ、飛んだことをしてくれな。」 と蝶吉の項を抱いて口移しに囁んで含めるやうに、自分の赤心を語るため、今まで久しい間、時に觸れ、折に當つて、動かされた、至憐至愛の情の切なるを、爰に打明けて語つたのである。

「蝶吉は聞くこと半ばにして、色を變へて、心、其心を貫くごとに、殆ど顔を見らるゝに耐へざる如く、摺抜けて駈出しもしかねない様子に見え、左に、右に、其面を背けたが、梓の手と、聲と、語と、真心は、益々力が籠つたから、身も世もあらず、動きもならずいふこと、爰に到る頃ひの、果は、悄然と

頭^{かしら}を垂^たれて、腕^{かひな}に落^{おと}した前^{まへ}髪^{がみ}がひやりとしたので、
手^た折^をった女^を郎^{みな}花^{へし}の儂^{はかな}い露^{つゆ}を、浮^うき世^よの風^{かぜ}が心^{こころ}なく、
吹^ふ散^{きち}すかと、胸^{むね}に應^{こた}へる。

三十四

「僕だつて最初から恚云ふ間の中といつちやあ、未始終は屹と泣を見なければならぬと思ふから、今度こそ別れるやうな話に爲ようか、今度こそと、其度に悄れちやあ此處へ來ると、何か不知お前に言はれること、爲れることが、一々思ひの増すやうなことはかり。私はもう一服づゝ痺薬を飲まされるやうだつた。

今ぢや家にも居られなくつて、谷中に引込むやうになつた上は、何うせ破れかぶれだから、人が何といつたつて、世間も義理も構ふことはない、お前と何うぞしてといふ覺悟を極めた處へ飛んだことを聞いて了つた。

お蝶さん、お前は譯が分らないから、何にも世の中のことは知るまいがね、凡そ墮胎といふことをした者は、之が罪とも恥とも知らないでした事にしろ、心は腐つても、人間といふ目鼻だけの、切めて皮でも被つてる中は、二人並んぢやあ居られやしない。

恚言へば水臭いと、屹度私を怨むだらうが、いつも言ふ通り、お前のやうな稼業をして居る者とは、兄弟であつたり従姉妹であつたりした上に、皆に多度世話にもなつた。何う云ふ因縁だか、お前にも恩を被た私だから、譯は分つてる、恚う見えても可愧しいが、馬車に乗つたこともあるし、御前様々々と畏られたこともあるが、大な聲一つ出してお前にやあ、用を言ひ付けたこともない。餘り大人しくツて、頼りがないから、私は何だか物足りない、きりツとして叱つてくれ、癩癩を起して横顔のツも撲られたいと、藝妓のお前に何時も言はれた、男が一人其位に惚れたら可からう。故郷とは始終便をして、人のおもちやになつてる女に、姉上々と書いたから、あゝ這麼ことをするやうな身分ではないと知りながら、お前の手紙が来れば、様づけにして返事を出した、何も機嫌を取つた譯でもなし、取入つて色男にならうと思つたのでもない。

上部は何うでも、理窟は知つてゝも、小兒の内かの爲来りで、本當に友達のやうにも思ひ、世話になつたとも思ふ上に、可愛い、不便だと思ふから、

前後も考へなかつた。

お前を立派な女だ、姫様だ、女房さんだと心から
思つて爲たことだよ。僕はお世辭も何にも言はない。
女は氏なくして玉の輿だから、甚麽身分の人に姉さ
んといはれないとも限らぬが、そりや男の方から心
を取つて惚れさせようとか、氣に入られようとかし
て、後ぢやあ玩弄にする爲だ。

可い餌をかつて肥えさしてしめて食べようといふ、
鴨と同じ譯ぢやあないか。これが遊人とか、町内の
若い衆とかいふなら知らず、些たあ身分もあるもの
に本當に惚れられた藝妓といつちやあ、まあ、お前
一人だらうよ。

それを思出にして、後生だから斷念めておくれ。
神月は私の良人だつたと、人にいつても差支へはな
い。そして謂ふに謂はれない仔細があつて別れたと
いつて御覽、お前の恥にやあならないから、よ、解
つたかい。

いまにもう少し年紀でも取つて、些たあ分別がついて来ると、成程無理はなかつたと、自分の爲たことに氣が付いて私の心も知れるから、體だけ大事にして輕忽をしないで辛抱しな。別れるといつて見棄てやしない、蔭ぢやあ何處までも思つて居る、
と神月もほろりとした。蝶吉は死んだ者のやうである。

「悪いことはいはないから、其の綿の入らないものを威張つて着るのと、いつもいふことだけけれど、これから暑くなつて、氷の打缺をお飯にかけて食べるのと、それから無理酒を飲むのは止せ、よ。氣を付けなけりや、お前今年は大厄だ。」

としめやかに言つたが弗と心付いて、手を弛めた、
 「酔醒か。寒くはないか。」
 「いゝえ、」と内端に小さな聲で、ものを考へるが如く蝶吉はいつた。

「然うか、又冷えると悪いぜ。」
 「えゝ。」と仇氣なく祕さず、打明けて縋り着くやうな返事をする。梓は此の聲を聞くと一入思入つて、あはれに最惜しくなるのが例で。

「體は最うすつかり良いのかい、」

「えゝ、」

「お前は駄々ツ子で、鼻ツ端が強くつて、威勢よ

く暴れるけれど、其の實大の弱蟲なんだから心配だよ、此頃は内で姐さんと喧嘩はしないか。」

「ふゝ、」と泣出しさうにしながら、蝶吉は無理に片頬で微笑む。

「矢張母様の夢ばかり見てるのか。」

「えゝ、」ともいはず蝶吉は面を背けると、御所車の簾の青い裏に、燃立つやうな緋縮緬を、手に搦んで、引出して、目を拭つて、

「何にも言はないで下さいな、胸が一杯になつて来てよ、可笑しいねえ、」といつて袖口を除けたが、ぱつちりと目を閉じて、梓を見まいとするかの如く、あらぬ方を瞞めたけれども、

「おや／＼、可けないねえ。」

又俯向いて目を塞いで、

「貴方、手を放して下さいな、」

聲も消入るやうであつた。

梓は左も右も蝶吉の心の落着いて居るのが知れて、いふまゝに手を放したが、殆ど失心して居るやうな

女の體は、其まゝ背後へ倒れるだらうと思つた。

蝶吉は、却つて、ちゃんとして、膝に兩手を組みながら、恍惚して梓の顔を見て居たが、細い聲で、

「あなた、」

「何うしたの、」

「後生だから顔を見ないで下さいな。」

梓は思はず面を背けた、火鉢の火は消えかゝつて籠洋燈の光も暗い、唯見ると瘦せた薄と、萎れた女郎花と、桔梗とが咲亂れて、黒雲空に、月は傾いて照らさむとも見えず、あはれに描いた秋草の二枚折の屏風が立つて居るのが、薄暗い灯で、幻のやうで、もの寂しい。

「私泣くんだから、あつちを向いても可くツて？」

梓は頭から寒くなつたが、俯向いて頷くと、蝶吉は向むきになつて屏風に影が映つた、其の胸をしつかり抱いた。

着物の振が両方から、はらりと迫つて、身も痩せ
た。細々とした指の尖が、肩から見えて、潰し島田
の亂れかゝつたのを、ふら／＼とさして熟として居
たが、折れたやうに身を倒す、姿はしぼんだ如く
なり、聲を殺してわつと泣いた。梓も耐らず、背向
になつた。二人の茫然した薄い姿は、件の秋草の中
へ入つて、風もないのに動いたと見ると、一人は疊
へ、一人は壁へ、座敷の影が別れたのである。

半札の圓輔

三十六

「切て早や、」と云ふ懸聲で大和家の格子戸を開けて入る、三遊派の落語家に圓輔とて、都合に依れば座敷で眞を切り、都合に依れば寄席で眞を打つ好男子。但し此男が眞の時は必ず御定連へ半札を出す例であるから、通稱は半札の圓公。鈴木が刎ねて生憎繰込のお供も仕らず、御酒頂戴も致されず、家へ歸つて妹ぢや間に合はずといふので、近所だから大和家へ寄ること一寸一寸。切てはや半札の圓公は、御神燈の下から、先づ御馴染の顔色を御覽に入れますると、

「よう！」と長火鉢の前から奇な聲を發して應じたものあり。内の姐さんか、あらず、傭の婆さんか、あらず、お茶を碾いてる抱妓か、あらず、猫か、あらず。あらず。あらず。湯島天神中坂下の松の鮓の倅源ちゃんである。此男錢を遣はずに女の子と遊

ぶのを以て、通と悟つたから耐らない。數寄屋町の御神燈の下を潜る事、毎夜恰も燕の如しで、殊に此の大和家には、蝶吉といふ、野郎首ツたけの女が居るから、其の取入ること一通ではなく、餘所の障子を張つて遣りの筆法で藝妓の用達から傭婆の手助までする上に、隙な時は長火鉢の前で飼猫の毛を梳いて居る。運が好いと、雛妓の袖を引張ることも出来るし、女中の臀を叩くことも出来るのが役得。蝶吉に肱鐵砲を食つて、鳶頭に懷中の駒下駄を焼かれた上、人の妓を食はうとする、獅子身中の蟲だとあつて、内の姉御に御勘氣を蒙つたのを、平蜘蛛で詫を入れて、以來吃度心得まするで、何卒相變りませず、今夜も來て居る。

「生憎抱妓どもは皆出を勤めて居らず、女中は忙しいし、姉御は用達にお出懸けなり、火鉢の灰は綺麗だし、注す後から鐵瓶の湯は煮立つので、色男餘の所作なさに、猫を撫でたり、擦つたり、何うしたなど、言つて見たり、耳を引張つたり、髯の數を數へたり、様々に扱ふと、畜生とて黙つて居らず、ニヤアと一聲身顫をして駈出さうとするのを、逃が

してなるか、と引抱て、首環に嚙り着いて、頬杖して、弗と思ひ着いて、「恩愛雪の乳貰」といふ氣取、態と浮かぬ面をして居る處へ、件の半札が扱て早であつた。

「師匠上り給へ。ようこそ、」と諸事内の人で挨拶する。

ぐツと呑込んで、圓輔はあたりを三し、「へえ、成程、生憎出懸けまして御愛想もございませんがね、何處へ、姐さんは。」

「又、これださうさ、」といつて窪んだ顔の眞中へ指をした、近眼鏡の輪を眞直に切つて、指が一本。何と氣を變へたか、宗匠、今夜は大いに使つて、印半纏に三尺帯、但し縹珍の蓑入に象牙の筒で、内々其のお人品な處を見せてござる。

圓輔は細長い膝を小紋縮緬の薄ぺらな二枚襲の上から、掌でずらりと膝頭へ擦り落すこと三度に、がつくりと俯向き、

「扱てはや。」

「何うしました、大分落膽の氣味だね、新情婦も出来ませんか。」と源次郎は三味線の掛つた柱に凭れて澄まして居る。

圓輔は又耳朶へ掛けて頬邊を扱き上げて、

「いや、先、はゝゝゝ、時に何は君の、落ッこちは何うしたんでげず、お座敷かね。」

「はゝあ、遠出でげすかい、何彼に就けて然ぞ氣が揉めるこつてえしよう、よ、色男。」と浮ッ調子で臀をぐいと突くと尋常に股を窄めて、

「止せッてえに、これ、詰らないことを、何だ。

恚う見えても苦勞があるんだから、ねえ、おい。」と甘ッたるい。」

「よ、苦勞！」
と仰々しく手を支凍て、ぐツと反つて、

來ましたね、隊長、恐入つたね、何うも。苦勞と

来たね、畜生、奢り給へ、奢り給へ。」

「何れ歸つたら奢らせることに致しませうよ。」
と北叟笑をする。

「これは！」

「否、師匠、じやうだん《一串戯》一は止してさ、
蝶吉が歸りさへすりや、是非其の御一統が一杯あり
つかうといふ寸法があるんでさ、極々吝嗇に行つた
處で、鰻か鳥ね、中な處が岡政で小ざつぱり、但し
ぐつと發奮んで伊豫紋とならうも知れず、私や鮪屋
だ！」

甘いものは本人が行けず、何れ其處等だ、まあい
待つて居給へ。」

「確に、」

「えゝ、確りだ。」

「豪い！」と大聲を張上げて、ぴたりと、天窓
を下げたが、ちやんと極つて、

「扱て何方です、恚うなると待遠しい。」

「八八八丁堀ださうだ。」

「成程御遠方だ。幾時頃から、」

「一昨日の晩から行きツ切り、おなじく、」と鼻を指して、「ね、曩使が来て、今夜は遅くとも歸るツていふんだ、ねえ、升どん。」

勝手から女中の聲で、

「はあ、」

「ねえ、おい、富ちやん。」

次の部屋の眞中で、盆に向つて、飯鉢と茶の土瓶を引寄せて、此方の灯を頼りにして、幼子が獨り飯食ふ秋の暮、といふ形で、搔つ込んで居た、哀な雛妓が、

「えゝ、」と答へてがツくりと飲む。

「確かい。」

「屹度でございますつて。」

「占めた！」といふ時から／＼と戸が開いた。

園輔は振返つて、

「や、御歸館！」と喚いて、座を開いて、くる

りと向く。

源次はぬうと首を伸ばして、

誰だい、

「蝶吉姐さんだよ、誰だ、あ何のこつた。」

「然う、」 といつて源次は猫を落して坐り直つた。

蝶吉は何か悄然として歸つて來たが、髪も亂れて、顔の色も茫然して居る。前垂懸で繻子の帯、唐棧の半纏を着た平生の服装で、引詰めた銀杏返、年紀も老けて見え、頬も痩せて見えたが、もの淋しさうに入つて脇目も觸らず、あたりの人には目も懸けないで、二階へ澄して上らうとするのを、圓輔が瞞めて、些と當ての違つたといふ形で、變に生眞面目に、

「お歸んなさい。」

「唯今、」 と言つたばかり、つんとして丁、丁、丁。

「御機嫌麗はしからずぢやあないか。顔色が可恐しく悪いぜ、花札が走つたと見える、御馳走はお流れか、」と圓輔はてか／＼した額を撫でた。

「いえ、師匠、御馳走は其の勝負にやあ寄らないんだ。但し御機嫌の悪いのは此節初中さ、心太の拍子木ぢやあないが、からぶり／＼してらあな。」

「猶且。と押へて、それか、と呑み込んだやうにいふと、源次は黙つて頷く。

「聲を低うして、何でげすかい、那の神月とやらいふ先生に一件が知れて、先方から突出したといふのは本當なんで？」

「あゝ、」と何だか聴きたくもなさうに、源次郎は乗らない返事。

「成程並べて置けば雛一對といふのだが、身分に

は段があるね。學士と謂やお前さん、大したもんでげせう。其上に華族の婿様だといふぢやあゝりませんか、幾ら若い同志で惚れ合つたつて、お前さん、其の身分で藝妓に懸り合つて屋敷も出たツてえから、世の中にやべら棒もあつたもんだ。其だから圓輔も大學へ入る處をさらりと止して、落語家となつたやうな譯だと、思つたんですが、いや、世の中へ顔出しも出来なくなつた處で、子を墮したと聞いて、すつぱり縁を切つたなあ有繋に豪いや、へむ、猪口の受取りやうを知らねえやうな二歳でも、學問を爲した奴あ要が利かあ、大したもんだね、して見ると蝶さんが惚れたのも男振ばかりぢやあないと見える、縊が戻りさうでもありませんかい。」

「何うして、些少でも脈がある内に鬱ぐやうな女ぢやあないんだ、きやツノゝて騒があね。」

「成程、して見ると此方人等一味徒黨。色情事に孕むなあ野暮の骨頂だ、ぼてと來るとお座がさめる、暮の食傷ぢやあねえが、お産の時は腸がぶら下りま、さ、口でいつてさへ粹でねえね、藝妓が孕んで可い

ものか悪いものか、先づ音羽屋に聞いて貰ひたいな
んてツて、あの女が、他愛のない處へ付け込んで、
おひやり上げて、一服承知させた連中、残らず、こ
りや怨まれさうなこツてげす。何を目當に、御馳走
なんぞ、へむ下らない。」

と圓輔は又落擔、源次は落着き澄して、

「師匠心配爲給ふなツてえのに、疑り深いな。」
「だつてあの御氣色を御覽じろ、屹度あれだ、違
えねえね、八八丁堀で花札が走つた上に、怨み重な
る支那と來ちやあ、こりや奢られツこなし。」

「勿論僕の、其の御相伴なんだよ。」
「へ、君だつて餘り、奢られる風ぢやありますま
いぜ。」

「ずツと有る、有るね、其處あ憚りながら源ちや
ん方寸にありさ。」
「ぢやあ一番お手形を頂きたいね。」
と圓輔は詰寄つた。

「手形宜しい。當てが違へば、師匠、何うだ、之を献上は。へ、詰らねえもんだけれど。」

と少し見せたくもあつて件の苜入を抜く。圓輔は打返して捻ツて、

「罷り間違へば、手前に此お腰のもの、些いと武士に二言はなしかね。」

「いや、江戸ツ兒だ。」と誰かの聲色で、判然となる。

「豪い？」と大聲で、ぴたりとお辭儀をした、圓輔は驚いて顔を上げる。

二階から蝶吉の聲で、

「富ちゃん！ 富ちゃん。」

「はアイ。」と引張つて返事をして、雛妓は膳を摺らして立ち、段階子の下で顔を傾けて、可愛らしく、

「何、姐さん。」

「あのね、私は今夜鹽梅が悪いから、何處から懸つて来てもお座敷は皆斷つて下さいな、そして姐さんがお歸りだつたら濟みませんがお先へ臥りましたツてね。」

「はい。」

「可いかい。」

蝶吉は、歸ると其時まで何を爲るともなく可厭な心持で、箆笥の前に茫乎然立つて居たのであつた。

「雛妓に言付けて、座敷を斜に切つて、上口から箆笥の前へ引返すと、一番目の抽斗が半ば開いて居

た。蝶吉は衝と立つて、

「おや／＼、私が開けたのか知ら、」

と思ひ寄らず呟いた。抽斗には、神月の寫眞をい
つも立て掛けて置くのである。

ふツつり切られて了つてからは、人は見なくツて
も、神月は知らないことでも、蝶吉は何となく、其
の寫眞を見ることさへ、我身で儘ならぬやうで儂い
ので、敢て、今は仇なれと、惚ぶ思の増すのが辛さ
に、佛を見まいとするのでない、身に過失があつて、
縁切つたと言はれた人の、假令其の姿でも、見ては
ならないやうにされた如く感じて居る。

抽斗の縁に手を掛けて、猶豫ひながら、伸上るや
うにして恐いものゝやうに差覗かうとして目を塞い
だ。がツくり支へるやうに抽斗を差し懸けて、あゝ
此の寫眞から下げて來ちや旨しいものを食べたつけ
と、耐らなくなつて、此方を向くと、背中であんと
閉ツた途端に、魂を拔去られたか、我にもあらず、
両手で顔を隠して、俯向いて、其のまゝ泣いて居た。

暫くして、蘇生つたものゝやうに、顔を上げる。

向の隅に、雛の屏風の、小さな二枚折の蔭から、友染の搔卷の裾が洩れて、灯に風も當たらず寂寞としてもの寂しく華美な死體が臥て居るのは、蝶吉が冊く人形である。搔卷は何時も神月と添寝した五所車を染めた長襦袢を裁つたのに、紅絹の裏を附けて、藤色縮緬の裾廻、綿も新しいのをふツかりと入れて、天鵝絨の襟を掛けて、黄八丈の蒲團を二枚。畳を六ツに仕切つたほどの處へ、其の屏風、其の枕、小さく揃へて寝かした上の、天井には犬張子の、見事大きなのが四足をぶら下げて動きもせず、一體遣りツ放しのお供で、白轉車に乗りたがつても、人形などは持つても見ようと思はない質であつたのが、兒を墮した爲に神月との縁が切れて、因果を含められた時始めて罪を知つて、言はれたことを得心してから、縁なればこそ折角腹に宿つたものを、闇から闇へ遣つた兒に、臆て追ひ着いて手を引くまで、詫をする氣で恚うして居る。恰も活きたるものを愛する如く、起きると着物を着更へさせる。抱いて風車を見せるやら、懷中へ入れて小さな乳を押付けるやら、枕を

並^{なら}べて寝^ねて見^みるやら、
餘^よ所^そ目^めには宛^{まる}で狂^{きち}氣^{がひ}。

「あゝ、天窓が重い、胸が痛い、體中がふら／＼する、もう寝ようや、」

蝶吉は枕を並べて、着たまゝ横になつて裾を伸ばして、爪先を包んだが、玉のやうな腕を人形の搔卷の上へ投げ掛けて、ぴつたり寄つて頬を差寄せ、

「坊や、些いと、何うしたの、お母ちゃんは可けなくツてよ、すっかりお花を引いて負けて來たわ。

二晩些とも寝ないんだもの、天窓が割れるやうなの、悪いわねえ、穴藏ン中でお前、六人一座でさ、灯は點け通しだし、息が苦しくなると、其處等へ酢を打つよ。私はもう死ぬやうだ。お前のお父ちゃんに叱られてから、お花なんざ引くまいと思つて、水も沸したんでなくツちや飲まないで居たけれども、お母ちゃんはお暇が出たんですもの、體を大事にしたつて詰らなくなつてよ。だから、最初ツから、お前さんに棄てられると、私は何うなるか知れないツて、始終いつて居たのにさ、打遣つて了つてさ、而して

軽^{かる}忽^{はずみ}なことをするなッて言^いつてくれ^たつて私^{わたい}は知^しり
ません。天^あ窓^{たま}へびんと來^くるやうな五^ご圓^{げん}花^{ばな}でも引^ひかな
くツちやあ、自^じ分^{ぶん}で生^いきてるのか何^{なん}だか分^{わか}らないも
の。

だ^だけどもねえ、身^みでも投^なげて死^しんじまふと、然^さも
面^{つら}當^{あて}にしたやうで、甚^ど麼^{んな}に心^{しん}配^{ぱい}を懸^かけるか知^しれない
し、愛^{あい}想^そを盡^つかされると、死^しんでからも添^そはれない
と悪^{わる}いから。何^{なに}も私^{あた}いを厭^{いや}なんぢやない、世^せ間^{けん}の義^ぎ理^り
だからつて言^いふんだけれども、何^{なん}だか自^じ分^{ぶん}勝^か手^てのや
うだわねえ。

何^どうせ早^{はや}く死^しにたいんだから、何^{なん}だつて、構^{かま}やし
ない。坊^{ぼう}や、お前^{まへ}でも生^いきてるなら可^いいけれど、目^め
ばツかりぱち／＼して居^ゐて、何^{なん}にも言^いはないんだも
の、張^{はり}合^あも何^{なん}にもありやしない。私^{わたい}も死^しんじまつた
ら、死^しんだものと、死^しんだものとだから、お前^{まへ}も口^{くち}
を利^きくだらう。少^{すこ}しも分^{わか}らないで爲^した事^{こと}だから、堪^{かん}
忍^{にん}することはするッて、お父^{とつ}ちゃんも然^さうお言^いひだ
から、坊^{ぼう}や、お前^{まへ}も酷^{ひど}いことをされて、鬼^{おに}とも蛇^{じゃ}と
も思^{おも}つてようけれど、堪^{かん}忍^{にん}して、母^{かあ}ちゃんと言^いつて

頂戴ちやうだいな。
「

と摺着すりついたが、がツくり仰向あをむき、薄うすい燈火ともしびに手てを翳かざして見たみた。

「おや／＼、瘦やせたわねえ。徹夜よとほしをして、湯ゆにも何なんにも入は入ひらないから、黒くろくなつたよ、段々だん／＼瘦やせて消きえれば可いいな。」

と袖口そでぐちを掴つかんで肩かたの邊あたりまで、撫なで下さげると、上うへへ伸のばして居あた着物きものは翻ひるがへつて、二ふたの腕うでもあらはになつた。柔肌やはくたに食くひ入いるばかり、金金具きんかなぐで留とめた天鵝絨びろうどの腕守うでまもり、内證ないしやうで神月かづつきの頭字かしらじ一字じ、神かみと云いふのが彫ほつてある。

蝶吉てふきちは清すしい目めをぱつちりと三みつて、恍惚うつとりとなつたが、枕まくらを上げると突然いきなり忘わすれたやうに食くひ付ついた、腕守うでまもりを嚙かんで、頭かしらを振ふつて、髪かみを揺ゆぶり、

「厭いやよ、私厭あたしいやよ、別わかれるのは厭いや、厭いや！ 厭いやだ、厭いやだ、別わかれるのは厭いや。」と、泣吃逆ないじゃくりをして、身みを顫ふる

はし、

「寫眞くらゐ見たつて、可いぢやないかね、可くないかい、えゝ、構ふもんか。私はもう、」

むツくり起上らうとすると、茫然犬張子が目に着いた。

「はツ、」といふ溜息で、又ばつたり枕に就いたが、舌打をして、

「寐ツちまへ！」
と縫り寄り、

「私も端の方へ入つてよ、坊や、さあ、お乳。」
といつて、見得もなく、懷を搔開けて、ふツくり白いのを持ち添へて、と見ると、人形の顔はふツと消えて無かつたのである。

四十一

「おや、をかしいねえ、」と吃驚して吃となつたが、蝶吉は出がけに人形の顔を搔卷の襟で隠して置いたのに氣が付いた。

「まあ、さつきから顔が見えたやうだつけ、それぢやあ、倂だつたか知ら。」

思はず悚然として、あたりを見たが、莞爾して、「一寸、肖て居ると思ふもんだから、お前は生意氣だね。」といつて搔卷の上を軽く叩くと、ふはりと手が沈んで應がない。

「あれい」とばかりで、考へたが、ソツと襟を取つて、恐々搔卷を上げて見ると、牡丹のやうに裏が返つた、敷蒲團との間には、紙一枚も無いのである。

蝶吉は我知らず、

「富ちゃん、」と聲を立て、眞直に跳起きた。

「はてな、」机に凭り懸つた胸を正しく、讀んでた雨月物語から目を放して、座の一方を見たのは、谷中瑞林寺の一間に寓する、學士神月梓である。

衣帶正しく端然として膝に手を支いて熟とも思ひに沈んだが、借ものゝ經机を傍に引着けてある上から、そのむかし、なにがし殿の庭にあつた梅の古木で刻んだといふ、渠が愛玩の香合を取つて、一捻して、

「這麼こつちやあ可かん。」と自から窺めるが如く呟いて、洋燈を見て、再び机に向つた時、室が廣いので灯も届かず、薄暗い古襖の外に咳く聲して、
「先生、御勉強ぢやな、」といひながら靜かに入つたのは、院の住職律師雲岳である。

學士の前に一揖して、

「お邪魔を。實は又一石願はうかと思つて、參つたがな、御音讀中でござつたで、暫時あれへ控へて居りました。何を御覽なさるか、結構なことぢや。」

襖越ではござるし、途切れ／＼で文章は能く聞取り
ませぬが、不思議に先生、今夜の貴方の御聲といふ
ものは、實に白蓮の花に露が轉ぶといふのか、恚う
其の溪川の水へ月が、映ると申さうか、如何にも譬
へやうのない、清い、澄んだ、冴々した、然ういた
して何か聞いて居る者までが、引入れられますやう
な、心細い情ないと、いつたやうに、自然とうら悲
しくなりましたが、一體お讀みなされたのは。」
と思入つた風情である。

梓は卜胸を突いた様子で、

「希代なことがあるんですよ、お上人、讀んで居
ましたのは御存じの雨月なんです、私も何故か目
分の聲に聞き惚れるほど、時々ぞツ／＼としちやあ
其の度に美しい冷い水を一掬づゝ飲むやうで、唾が
涼しいんです。近頃は何云ふものか、ものを言ふに
さへ、唾がねばつて、舌がぬめ／＼して心地の悪さ
といつたらなかつたんですが、まあ、體が半分水に
なつて、それが解けて行くやうで、月の掬で洗つた
やうです。それで居て爽かな可い心持かと思ふと、
然うぢやない、此處ン處が。」といひかけて、梓

はうら寒さむげに、冷つめたい衣きぬの上うへから胸むねを壓おさへた、人ひとに
も逢あはず引籠ひきこもつて、二つ月きあ餘まり、色いろは益ます々く白しろく、目めは益ます々く
涼すずしく、唇くちびるの色いろは彌いぢが上うへに赤あかく、髪かみは稍やゝ延のびたが、
艶つやを増まして、品ひん好よく瘦やせぎすな俤おもかげは、見みるともの凄すごい
ほどである。

「胸騒むねさわツていふんでせう。」

四十二

「痛いのかと思ふと然うでもなしに、むず痒い、頼たよりない、もので壓おさへつけると動氣どうきが跳をどる様やうで切せつなくツつて可いけません。熟じうとして居をれば倒たふれさうになるんですもの、其それを紛まぎらさうといつになく、聲こゑを出だして讀よみ出だしたんですが、自じ分ぶんで凄すこくなるやうに、仰おつしや有あれば成程なるほど良いい聲こゑといふんでせうか。」

「なか／＼、幽冥いうめい通つうじて、、餓鬼がき畜生ちくしやうまで耳みみを傾かたむけて微妙びめうの音おん樂がくを聞きくといふ音調おんてうだ、妙めうなことがあるものでございますな、そして、矢張やはりお心持こゝろもちは。」

「憑物つきものでも放はなれて行いつたやうに思おもふんですが、こりや何なんなんでせう、いづれ其事そのことに就ついてゞせうよ、」
と微かすかに笑あみを含ふくんで、神月かづつきは恥はづかしげに上人しやうにんが白しろき鬚ひげある素なつめの如ごとき面おもてを見みた。

「何どうしても思おもひ切きれなかつたんです、實じつは

。。
L
爰こゝに梓あつぎが待人まちびと、辻占つじうら、疊算たゞみざん、夢ゆめの占うらひなひなどいふ迷信めいしんの盛さかんな人ひとの中に生うまれもし、育そだちもし、且かつ教をしへられもしたことを豫あらかじめ斷ことわつて置おかねばならぬ。

はじめ蝶吉てふきちと歌枕うたまくらで逢曳あひゞきの重かさなる時分じぶん、神月かうづきは玉たまつ司子爵かさしゝやくの婿君むこぎみであつたから、一躰てき千金きんは其その難かたしとせざる處ところ、蝶吉てふきちが身みを苦界くがいから救すくふのは敢あへて困難こんなんな事ことではなかつた。

尤もつとも他ひとと違ちがひ、神月かうづきは、己おのれが既往きわうの経歴けいれきに徴ちやうして、花街くわがいにあるものゝ、却かへつて、實じつがあつて、深切しんせつで、情じやうを解かいして、殊ことに一種しゆにんけふ任侠にんげきの氣きを帯おびびて居ゐることを知しつては居ゐたが、有さすが繫きよに清きよい、美うつくしい體からだのものだとは思おもはない。其その殆ほとんど、掌たなせこにも、額ひたひにも、惡汗あゐあせ一ツ搔かいたことのない、黒子ほくろも擦傷すりきずの痕あともない、玉たまの如ごとき身みを投とうじて、之これが歌枕うたまくらの一室しつに、蝶吉てふきちと衾ふすまを同おなじする時ときは、然さばかり愛憐あいれんの情じやうは燃もえながら、火中くわちう一條でうの冷龍れいりうあつて身みを守まもり、婀娜あだえうてう窈窕えうてうたる佳人かじんにも梓あつぎの肌はだを汚けがさしめず、幾分いくぶんの間隙かんげきを枕まくらの間に置おいたの

であるが、一朝、蝶吉はふツと目を覺して、現の梓を揺起して、吃驚したやうにあたりを見ながら、夢に、菖蒲の花を三本、蒼なるを手に提げて、暗い處に立つてると、明くなつて、太陽が射した。黄金のやうな其の光線を浴びると、見る／＼三輪ともぱツと咲いた、何故でせう、といつて、仇氣なく聞かれた。梓は恰も悪夢に襲はれて、幻の苦患を嘗めて居た、冷汗もまだ止らなかつた位の處へ、この夢を話されて、面を赤うするまで心に恥じた、あはれ泥中の此の白き蓮に比して、我が心却つて汚れたり、學士は染々蝶吉の清い心を知つた。

「其時と、いま一度は、蝶吉が然るべき軍人の一座の客に呼ばれたが、言ふことが癩に障つた上に、酔つて懷の玉を探らうとしたので、癩癩を起して其の横顔を平手で撲ると、虎髯を逆にして張飛のやうに腹を立て、ひい／＼泣入る横腹を蹴つけたばかりでは合點せず、其日の主人役が客に濟ずとあつて、死だものゝやうになつてゐるのを引き起し、二人兩手を取つて、小刀で前髪を切つて、座敷をつツ立つた。居合した朋輩も、女中も、駈上つた若い者も、顛へ

るばかりで、取とりおさへ手てもなかつたといつて、梓あづきに
顫ふる着ひいて口く惜やしがつた時ときには、耐たままらず其その場ばから車くるまに
乗のせて、之これをわが園そのへ移うつし植うゑようと思おもつたのであ
る。

固より其時には限らない、女は迷惑を懸けようとはしないので、一生藝妓をして居るから、變らず見棄てないでさへくれゝば可いといふのだけれども、いふが如く、聞くが如く、將た夫れ見る如き氣性の女、梓は心が動く毎に勤を落籍さうと思はぬことはなかつたが、渠が感情の上に、先天的一種の迷信を持つてるといふは爰のこと。

一體、天神様の境内で、恩を謝す心を決して以來、其の機會がなかつた處、翌年一月、伊豫紋で、大學出の人の新年會があつた。一座の中に蝶吉が居た。又一座の中に、下宿の二階に住んで六疊の半ばを蔽ふ白熊の毛皮を敷いて、ぞろりと着流して坐りながら、下谷の地を操縦する、神機軍師朱武あつて、疾より秘計を圍らし、兵を伏せて置いたれば、酒半ばにして哄と矢叫の聲を立てゝ、突然梓の黒斜子に五ツ紋の羽織を奪つて、之を蝶吉の肩に被せた。嬉しい！と手を通して、出の三枚襲の上へ羽織ると齊しく引緊めて、裾を引いたまゝすつと出て座敷を消

えると、色男梓君のために、健康を祝してビールの満を引くもの數を不知。梓は丸腰の着流し、恰もお館の法度を犯して裏庭から御臺のお情で落ちて行くやうに、腕車で歌枕に送られたが、後を知らず、顔色も悪く未明に起きると、帯を取つて、小取廻に尖を渡して、本式に疊んで置いた袴の腰板を取つてあてがひ、着たまゝ枕頭に坐つて介抱して居た蝶吉が件の羽織を惜さうに脱いで被せた。人肌のぬくみも去らず、身に染みた移香を其のまゝ、梓は邸に歸つて、ずつと通ると、居間の中には女交りにわや／＼人聲。明けて入るのを、小間使が、あれといつて、手を突く間もなく、一人が背後からぴつたり閉めた。兩戸は半間のまゝ、朝がけの軍に狼狽へたやうな形。拂を持つやら、箒やら、團扇を翳して居るものやら、何處に透があつて立ち込んだか、鶯がお居間の中に、あれ／＼といふ。鴨居から飛んで、到來ものを飾つた雪の積つたやうな満開の梅の盆栽の枝に留つたのを、逃がすなと箒を突出すから、梓は引留めながら件の羽織を脱いで、はらりと投げたのが、中に鶯を包んで落ちた。

手を入れて、勞り取つて、二十四の梓は嬉しさうに、縁側を傳つて夫人龍子の寢室に入つて、寢臺の枕頭に押着けて、呼起して、黄鳥を手柄さうに見せると、冷やかに一目見たばかり。

（私は未だ起きる時間ではございません。と背後も向かず自若として目を瞑つた。其時も梓は顔の色を變へたのであるが、争ふこともせず。

（失禮、）といつてずつと出て、廊下に立ちながら籠を命じ、持つて来る間を、手では、と懐に入れながら、見霽の湯島の空を眺めて居る内、いかなる名鳥か嚶々として、三度、梓の胸に鳴いたのである。

が、籠が來て懐から出さうとすると、羽ばたきもしないので、早や馴れたかと思ふと、あはれ、翼をちぢめて目を落して居たのである。蒔繪の鳥籠に、件の盆栽の梅を添へて、わざ／＼葬らせに使を出した。以來心に懸つて、蝶吉を落籍さうと思ふ度に、然ることはあらずと知りながら、幼い時からの感情

で、羽織はおりの同一をんなじの兆てうをなして、恐おそらく、我わが手てに
彼かれを救すくうて之これを掌中しやうちうの玉たまとせむか、時ときを措おかず碎くだけ
るのである。日ひもあらず煩わづらひでもするのであらう、
寧むしろ、生命いのちが長ながくあるまい、と思おもふ念ねんに制せいせられて、
其その壽ことぶきを欲ほつするため、常つねに躊躇ちうちよして居ゐたのであつ
たが。

四十四

「一旦縁を切つて了つた上では、私
 が心持にも、又世間《一せけん》一の義理にも、疚
 しいことはないんですから、其が未練といふんでせ
 う。其中玉司《一たまつかさ》一へ行つて、表向縁
 を切りかたノ、彼の男は手切を取ると言はれても
 構はない。藝妓を落籍せると隠さずにいつて、金子
 を取つて、其で、勿論二度とかゝりあひはしない意
 ぢやありますがね、苦界だけは救つて素人にして遣
 らうと、お上人、可愧いんですが言ひます。實は其
 を心樂みにして、幾分か未だまるツ切離れて了はな
 いやうな氣で、當分逢はないだけだといふやうな心
 持で居つたんです。

先刻私を尋ねて来た、品の可い老女があつたでせ
 う。彼は玉司に昔から勤めて居る取しまりで、何十
 年にも奥からは出た事がない、まだ鐵道は甚麽もの
 だか知らない女で、龍子の乳母なんですが、實は其
 の用で參つたんで、私に又歸《一れつていひます》。
 其とは那麽御氣性だから、怪我にも仰有りはしない

けれども、何をいつたつて、初めて男を知つたお姫様だ。貴方が内を出てからは、鬱々として人にもお逢ひなさらぬ。

醫者は神経衰弱だといふさうですが、不眠性に罹つて、三日も四日も、七日ばかり一目もお寐みなさらない事がある。悩みが一通ぢやない。此間もうと／＼しかけた處へ、縁側を通つた腰元が聲音を立て、其がために目が覺めたといつて腹を立て、小刀を投付けて、もう少しで腰元の胸を突かうとしました。

此頃ぢや、宛然一室の外へも出て来ないやうな始末。見かけは甚麽でもよく／＼心を知つてるのは、乳母だから、私に歸れ。

承れば大分御謹慎で、すつかりお品行も治つたさうだつて、然う云ふことでもございました。

随分片意地な老女が、我を折つて居ましたから嘘ぢやありませんまい。

成程なるほど其それでは那麽あんな夫人ひとでも私わたしを其迄それまでに思おもつてくれるのが解わかりましたが、恚かうなつた上うへのこと。

謹慎きんしんをして居あるのは、敢あへて辛抱しんばうを見みせて、玉司たまつかさの家いへに歸かへりたいためではないから、斷然だんぜん、これツ切きりだと思おもつてくれ、私わたしの引籠ひきこもつて身みを責せめて居あるのは、唯先祖たゞせんぞに對たいして濟すまないと思おもふからだ。

ときつぱりいつて歸かへしましたよ。」

「ふう、」と上人しやうにんは頷うなづいて、ぢつと考かんがへ、

「いや、段々だん／＼お心が靜しづまつて來きて、好よい御返事ごへんじをなされた、結構けつこうぢや。」といひかけて、梓あづさの物もの寂さびしげなる顔かほを見みて、

「其それで薩張さつぱりとなされたかな。」

「えゝ、薩張さつぱりした其その所爲せゐだらうと思おもふんです。まだ、金かねの蔓つるがあつて、一式しきのことに落籍ひかして素人しろうとにして遣やらうと、内々ない／＼思おもつてました内うちは、何なにか不知しら心の底そこに温あつたまりがあつたのを、斷然だんぜん、使つかひを歸かへした上うへ、夫ふじ人の心こころも知しれて見みれば、いかに棄身すてみになつた處ところで、無心むしんなどいへたものぢやあない。然さうすりやお蝶てふの

方も、もう彼ツ限、ふツつり切れた、私は恚う孤島
に獨り残されたやうで心細い、胸騒のするのは其の
爲に違ひないんです、お可愧いね、
「といった清らかなる學士の笑顔はうら寂しい。」

「はゝあ、いや、お若い中又餘り悟り澄さないのも宜しからう。多度迷はつしやるも面白い。」と
此人がこそ悟り切つたらしいことをいつて、
「何々と笑つて、行きがけに大音で、
「誰ぞ先生に茶を上げい。」

梓は又机《一つくゑ》一に向つたが、木の角では、
心の跳るのが押へ切れず、胸騒がする、
氣が鬱ぐ、
もう引入れられさうで耐へられなくなつて、
香の薫に染みた不斷着を其のまゝ、
恚る時、梓が行くのは
必ず湯島。

白木の箱

四十五

「富ちゃん、一寸、富ちゃん、私の人形を知らなくツて、」

あたふた狼狽へたやうなものゝ氣勢、癩癩交りに呼んだのは蝶吉である。

「一件だ、」と、之を聞いて豫て心得たものゝ如く、源次は傍に目配せした。

「來ましたね。」と低聲でいつて、譯もなく天窓を叩いて竦んだが、圓輔は、えへん！ 聲繕をして二階に向ひ、

「お蝶さん、何ですか、人形。人形處かい、其處どころぢやあない、大變なことがありますぜ、一寸大したこツた、豪いこツたよ。」

「何、」と切つて棄てたやうな、つつけんどん

なものの言ひである。

「まあさ、一寸おいでなさいていこつた、こつたの性なら下まで来いだよ。」

「富ちゃん、富ちゃんてば。」
蝶吉は取合ずに、雛妓ばかり呼立てる。

「まあおいでなさいつていふのに、何ですぜ、一寸、大變なこつた、お蝶さん、神月の旦那から、」

「えゝ、」
「それ見ねえ、」と源次が一寸突いて、にやりと笑ふと、圓輔は大乗地で、
「旦那から、もし小包郵便が来たんですぜ。」

「えゝ。」
「神月さんからお届けものだ。」と源次も傍から口を添へる。

「知りませんよ。」と邪険には言つたけれども、其中自「一おのづか」一「和のある、音色を下で聞

澄すまして、

「御存ごぞんじの筈はずですが、神月かうつきさんといやあお前まへさ

ん、

「可いいよ。」

「宜よろしくばお止やめになさいまし。」 と大おほいに澄すまし、顔かほを見合みあわせて黙だんまりとなつた。

「富ふうちゃん、」

「そら、又また富ふう《一ふう》一ちゃんだ。」 といつて圓輔ゑんすけは、敷居しきゑの處ところまで來きて立たつて居ゐる雛妓おしやくを見みて屹きつと目めで知しらせた。

「私あたいは知しらないの。」

暫しばひくして、聲こゑも優やわしく、

「いゝえ、小包こづつみさあ、」

「本當ほんたうだつてば、何なにを疑うたくんだな。」 と源次げんじは

大真面おほまじめで居ゐる。

「嘘うそばツかり、」 といひながら、一寸ちよいとためらつ

た様子やうすであつたが、階子段はしごだんが丁トと鳴なつた。

下から仰山に遮つて、

「一寸お待ちなさい、お蝶さん、請取が入ります
ぜ、入らつしやるなら、何うぞ、御懷中物を御持参
で、」

「宜しい、」と男らしく派手に爽にいつた。こ
れを機掛に、蝶吉は人形と添寝をして少し取亂した
まゝ、しどけなく、亂調子に三階から下りて来て、
突然、

「何處にさ、」と嬰兒の強請るやうにいひなが
ら、人前を澄した顔。

「氣か疾いな、何うも、師匠出して遣り給へ。」
「先づお受取を頂戴いたしたいやうな詳で。」

「すツかり負けて來たんですから多度はなくツて
よ。」

「豪い！」といひさま、小紋縮緬で裏が緞子、
同く薄ツペらな羽織を翻りと撥ねて、お納戸地の帯
にぐいとさした扇子を抜いて、とんと置くと、ずつ

と寄つて、紙幣を請取り、

「何にいたしませうな。」

源次は取片付けて、

「まあ、師匠。」

「ぢやあ一寸升どん。」

勝手から、

「御馳走様ですね。」

四十六

「扱てはや、何でげすえ御到來物は。」と圓輔
 は洋燈の方へ顔を突出し、源次は柱に天窓を着けて
 片陰で仰向いた、此の兩人、胸中を入違ひに、長火
 鉢の前で形が。

「何うもお相伴を難有うございますよ。」と向
 へ坐つたのは、遣手が老いたりといふ面構、目肉が
 落ちたのに美しく齒を染めて居る、胡麻鹽天窓、こ
 れが祕薬の服方、煎法、墮胎した後始末、體の養生
 まで一切取計つた、口の臭い、お倉といふ婆である。

蝶吉は、確に小包を請取つたので、恠くとは思ひ
 懸けず、慎みながら、若いから、今も今で、豫てい
 ひつけられて窘んだ、花札を引いて、氣の衰へるま
 で負けて歸つたので、濟まなさも濟まないし、嬉し
 さも嬉しければ、包んでも色に出る極の悪さ。震へ
 る手で明い處へ持出して、顔を見られまいと、傍目
 も觸らず、血の上つた耳朶を赧うして、可愛らしく
 畏つて、右見左見、

「おや／＼、大倭家内松山峰子様行と書いてあるねえ。」

「峰子様、よッ。」と懸聲をするは圓輔なり。

「可くツてよ、」と可愧しさうに、打返して又裏《一うら》一を見た。

「神月より、おや、平時の字と違つ

てやしなくツて？ 何だか手が違つてる

やうだねえ。」

「敢て疑ふといふではないが、まさかと思ふ心から人にも、極めて貰ひたいので、態と不審げに呟いた。

「態ツと手を替へてお書きなさいましたあね、そりや、お前さん。」と、婆々は極めて鹿爪らしい。

「然うねえ、何だか包が大きいわねえ、何だ知ら。」

玉手箱といふ形で両手に据ゑながら目を瞑る。

「何でげせう。」

「何だか、」

「然うさね。」

「一番あてツこで、丁と出たら又頂戴」一ちやうだい」一は、何うでげすえ。」

源次は鷹揚に、

「下司張るな／＼。」

「何うせ詰らないものよ。」と蝶吉は笑ひたさ

うにして押耐へる。

圓輔は例に因つて、

「よツ！」

「澤山おひやらかして下さいな。」と怒つたの

でも何でもない、いそ／＼膝の上へ抱下して斜にした。

蝶吉は簪を抜いて、そつと持つて、

「邪険に對をしてさ。」といひ／＼、名工が苦

心の眼で、瞞めて、簪の尖で、對じ目を切つて解く。

上包はくる／＼と開いて、やまと新聞の一面が
颯と膝の上に廣がった。中は、中は、手文庫ばかり
の白木の箱。

「さあ／＼御覽じろ、對が解るに従うて、お蝶さんの、あの顔が段々弛んで來る處を、」
「何云ふ譯だか、不思議なもんさね、」 と源次郎は憎體な。

「私澤山だ。」

「何もお前さん那樣につんとすることはないぢやありませんか、頬を膨らしてさ。」

「一生懸命でおいで遊ばす、さあ、耐らない。ほれ、」

「それ笑つた。」

蝶吉は莞爾して、

「御免なさい、」 といふかと思ふと、引攪ふやうに小包を取つて、裳を蹴返すと二階へ、ふい。

驚いたのは圓輔である。ぐんにやりとなつて、
「豪い！」

四十七

「堪忍なさいな、私は見向いても下さらないんだと思つて、自暴よ、お花札なんか引いてさ、堪忍して下さいな、可くツて。おまへ様の深切を無にしたやうだけれど、だつて爲やうがないんだもの。これから屹度大人しくしますから。いひつけた通にして居ると思つて在つしやるんだよ。悪かつたわねえ。それでも開けても可くツて。嬉しいなあ、」と胸を抱しめて身を顫はした。此の音信があつたので、許されたものゝやうに思はれて、蝶吉は二階に上ると、先づ其の神月の寫眞を懷に抱いたのであつた。

其でも箱の中が氣に懸つて、それは／＼して手も震ひ、動悸の躍るのを忘れるばかり、寫眞で壓へて、一生懸命になつて蓋を開けた。

箱の中には紙にも包まず裸の人形が入つて居る。

ふつと見て少し色を變へて、

「おや／＼、をかしいねえ、あてツこすりに寄越

したのか不知、私を這麼にして置いて、まだ那樣こ
とをする方ぢやあない、」と此時氣が付いたのは、
自分の人形のことである。

蝶吉は夢のやうな心持がして、氣味悪さうに、灯
の暗い、森として、片附いた美しい二階の座敷を
したが、然うだ、小包が神月からといふのに顛倒し
て忘れて居た、先刻を思出すと、悚として、ばたり
と箱を落して立ち、何を憚るともなく、浮足で、密
と寄つて、蒲團を上げて見ると何にもない。思切つ
て、白い手を冷い小さな閨の中に差入れると、丹精
をして着せて置く、筒袖の着物に襦袢、縮緬の書生
帯まで引くるめて、圓げてあつた。蝶吉は、呼吸を
詰めて、唾を呑み、座に直つて、引寄せて、熟と見
て蒼くなつた。涙をはら／＼と落して、震ひ着いて、
「坊や、」とばかり、あはれな裸身を抱へ上げ
ようとして、其の乳のあたりを手に取ると、首が抜
けて、手足がばら／＼。胴中の丸いものばかり蝶吉
の手に残つたので、
「厭！」と聲を上げざまに、蛇を掴んだと思つ
て、どんと投げると、空を切つて、姿見に映つて落

ちた。

「あれえ。」

下階では哄と笑ふ聲、圓輔は吃と見得をして、

「今のは確に、」

「叱！」と押へて源次はしてやつたといふ顔色。

「雲井の印紙を引剥がして、張り付けて、墨で消

印を押したお手際なんざあ、」

「甚麼もんだい。」

「いや、御馳走様でございますよ。」

「口惜しい！」と泣く聲が細く耳を貫いて響い

たが。

下じめの端を両手できりノノとメめながら、蹠踉
いて二階を下りて来た、蝶吉の血相は變つて居る。

顔も蒼白く、目が逆釣り、口許も上に反つたやう
に齒を噛んで、驚いて見る下地ツ子の小さな手を碎
けよと掴んでぐツと引着けた。

「あれ、姐さん。」

「さあ、言つとくれ、言つとくれ、承知しなくつてよ、私の、私の人形を那麼にしたなあ誰だ。いゝえ、知らないツたつて不可いの、那麼にお前さんにも頼んで置くものを、」と力を籠めておさへるやうにいつたが、ぶる／＼震へる、額には筋が通つた。

「手も足もばら／＼よ、酷いツたら、酷いことよ。さあ、誰だか、いつてお了ひ、否、聞かしておくれ。蔭になり日向になり、初終庇つて遣る姐さんだ、お聞かせなね、えゝ！ 畜生言はないかい。」

「痛い、痛い、姐さん。」といべそを搔いてたのがわつと泣出した。

灰神樂

四十八

「ま、ま、お前さん何でございます、手荒なことを。」と婆は居合腰に伸上つて、袂を取つて分けようとすのを、身悶して振拂ひ、振向いて屹と見て、

「お姿さん、お前にも私は怨があつてよ、可い加減なことをいつて誑してさ、お肚が痛いか擦らうなんぞツて言つておくれだから、深切な人だと思つたわ、悔しいぢやあないかね。畜生、放せ、何をするのよう。」

「おや、恐い、恐いこツた。へん、」と太々しい。血眼でもう武者振附さうだから、飽氣に取られて居た圓輔が割つて入つた。

「扱てはや、」

「えゝ、手前達の手を觸る體ぢやあないんだい、

御亭主ごていしゅが着ついてるよ、野の幫だい間こめ、「と平ひら手で横よこ顔がほをあびたりと當あてる。

天窓あたまを抱かへて、

「豪えらい、」と吃びっくり驚り。

「亭てい主しゅ持もちが凄すさまじいや、向むかうから切きられた癖くせに、何なんだ、取とり揚あげ婆ばのさかさまめ、」まさかに恚いかうとは思おもひ懸かけず、いやがらせをやつて、翩なぶつて奢おこらせた上うへ、笑わらひ着つけて、下げ駄たの肚はら癒いせをして、それから、仲なか直なほりをして、一寸ちよいと惡あく黨たうな處ところを見みせて、其そこ處ら等らで思おもひ着つかれようといふ際さい限げんのない大おほ慾よく張はり、源げん次じは源げん次じだけの考かんがで、既すでに今こん夜や印しるし半はん纏てんで、いなつて反そり身みの始しま末つであつたが、惡わる戲さも、人にん形ぎやうの手て足あしを二もいで置おいたのに極きはつて、蝶て吉きちの血けつ相さうの容よう易いでなく、尋た常じょうでは納をさりさうもない光くわ景けいを見みて、居ゐ合あすは恐おそれと、立たち際ぎはの惡にく體てい口くち、

「様さまあ見みやがれ、」とふてを吐ついて、忘わすれずにたばは人いれを取とつて差さし、生なま白つちるい足あしを大おほ跨またにたふいと立たつて出でようとする。

「待ちやあがれ。」

「え、」

「悪戯をしたなあ、源の野郎、手前だな。」

「否、私だ。」とすつきりいつて、ずつと入つたのは大和屋の姐さんで、鳶吉といふ中年増。腕も器量も凄いのが、唐棧づくめのいなせな形で、暴風雨に屋根を取られたやうな人立のする我家の帳場を、一渡わたりみまほしながら、悠悠いゆう／＼として、長火鉢ながひばちの向側むかうがは、之これが其の座ざに敷しいてある、黒天鵝絨くろびろうとんの大座蒲團おほざぶとんにきちんと坐すわつて、「寒い。」と肩かたを一つ揺ゆつて置おいて、

「皆静みんなしづかにしておくれ、お蝶てふさんお前まへもおすわり。」

「何なんですつて、」と蝶吉てふきちは目めを据すゑて立たつた

まゝ、主婦あるじが方かたに向直むきなほつて、

「悪戯いたづらをしたなあ、お前まへさん、」と屹きつといふ。

「あい、私わたしさ、」

「何なに、」

「突立つったつて、何なんだ。」

「坐すわつたら何どうおしだい。」

「おや／＼、此女は、目が上つてるよ、水でもぶ
ツかけてお遣んなね。」

「まあ、姐さん、」 とばかりで圓輔は遣瀬がな
い。

「お蝶私は主人だよ。」

「は、私お前さんの抱妓ぢやありません、誰が、
那樣水臭い、分らない奴に抱へられるもんか。人が
知らないと思つてさ、薬を飲ませてさ、その所爲で、
私逢へないんぢやありませんか、命も入らない人よ。
あんまいり思遣がない、何が氣に入らないで、人形
を壊したのよ、よ。お前さんは悪いことを、ようく
知つて、私に教へてさ、無理に那麼ことをさせて置
いて、まだ足りなくツて。畜生！ 義理知らず、お
前さんの出は田舎ぢやあないか、私はね、仲之町で
育つたんです。」 と蝶吉は急き上げて言ふことも
しどろである。

四十九

「黙れ、黙れ、黙れ、えゝ黙らないかい。」と
いひさま持つてた長煙管で蝶吉の肩をぴしと打つた。

「畜生！」

「生意氣な、文句をいふなら借金を突いて懸るこ
つた、分が何だい、憚ンながら大金が懸つてますよ。
然うさ、また仲之町でお育ち遊ばしたあなたゞから、
分外なお金を貸した譯さ。しつ越もない癖に、情
人なんぞ拵へて、何だい、孕むなんて不景氣な、那
様體は難産と極つてるから、血だらけになつて死な
いやうにとお慈悲で墮して遣つたんだ。商賣にも障
りまず、此方や何も慰に置くお前ぢやあない、お姫
様も可い加減にして置くが可いや、狂氣。朝から晩
まで人形いぢくりをし通されて耐るもんか、外の妓
にも障るんです、五人六人と雑魚寢をする二階に那
麼もの開放しにして置かれちやあ邪魔にもなるね。
面も生ツ白いし、藝も出来て、些たあ賣れるからと
大目に見て、我まゝをさして置きやあ附け上つて、
何だと、畜生。もう一度いつて見ろ、言はなきやあ

言はして遣らうか、

と乗上つて火鉢越に、又其《一そ》一の頸のあたりを強く打つたのである。

「神月さん！」と蝶吉は半狂亂で悲鳴を上げる。

「まあさ、まあさ、姉さん。」と圓輔は手持不沙汰なのを頻に揉む。

「一體口が過ぎるんですよ。」と婆はねつゝり。
「いゝえ、たまにや這麼目に逢はせて置かないとね、いゝ氣になつてつけ上りまさあね。神月さんが何うした、向うから突出された癖に何だい、器量の悪さツたらありやしない、呼べるなら呼んで見ることが可いや。」

「えゝ、呼べなくツて、」と泣々いひながら、立たうとするのを、婆が無手と掴まへた。

「お前さんは。」

蝶吉は弱々となつて崩折れて、
「悔しい、悔しい、悔しい、悔しい、悔しい、皆で私を、
私を何うするのよ。何うせ死ぬんだから、さあ、殺
してお了ひなさいなねいさあ、さあ、」と小供が
捏々をいふ如く、横坐になつて、顔も體も水から上
つたやうにびツしより汗になりながら、投遣りに突
かゝる。

「殺して耐るもんか、大枚のお金子だあね、なあ
お姿さん。おほゝゝゝゝ。」

「左様でございますとも、はゝゝはゝゝ、」と笑
ひつけて敢て不關焉

眞蒼になり、髪も亂れて、泣吃逆をしい／＼、
「殺さなくツたつて可いのよ、可いのよ、厭なら
止せ、私何うせ死ぬんだから。そして、あの皆神月
さんに言付けて遣るから覚えて居るが可い。私誰も
構つちやあくれないんだもの、世間にやあ、鬼ばツ
かり。」とはや血が狂つたか舌も縊れて他愛がな
い。

「えゝ、性根をつけないかい！」と、力なく己を捕へた敵の腕、婆の膝により懸つて肩で息を吐いて居る、胸の處を、又一つ煙管で撲つた。

途端に絲切齒をきりゝと鳴して、脱兎の如く、火鉢の鐵瓶を突覆すと、凄じい音がしてと立つた灰神樂、灯も暗く、あツといふ間に、蝶吉の姿はひら／＼として見えなくなる。

「待て、」と縋つて戸口で押へたのは源次であつた。

物をも言はず、据つた瞳で、ぢつと見るや、兩手に持つた駒下駄を襷がけに振つたので、片手は源次が横顔を打つて退け、片手は磨稍子の戸を一枚微塵に砕いた、蝶吉は翻つて出たと思ふと、絲を曳くやうに颯と駈ける。

「こりや、待て。」

學士は胸騒がして、瑞林寺の其の寓居に胸を壓へて坐するに忍びず、常に然る時は行いて時を消すが例であつた湯島から、谷中に歸る道の暗がりで、唐突に手を捕へたのは一名の年若き警官である。

梓は氣も心も沈んで居たから少しも騒がず、固より驚く仔細はない。靜に顧みて、

「私、」

「何處へ行くか、あツ貴様は。」

言葉も荒く、ものに激して居るやうである。

「谷中の方へ行くんですが、」

「うむ、墓原へでも寐に行くか、嘘を吐け！ さま掬摸ぢやらう、」と殆ど狂人に齊しい譎言を言つたけれども、梓はよく人を見て、此の年少巡査が敢て我を誣ひむとする念慮のあるでもなく、又罪人《一ざいにん》一を惡む情が烈しいのでもなく、

単に職務に熱誠であるため、自ら抑ふることの出来ない血氣に逸るのであることを知つた。

「貴方御心配には及びません。」と微笑むばかりに涼しく答へる。清らかな其の面を見ても、可憐しい香の薫の身み」一に染みたのに聞いても、品位ある青年であることが分るであらうに、警官は餘り職務に熱心であつた。

「名を言へ、番地は何處か。」

「こら！」と驚くべき聲で詈り喚く。

「敢て憚る處はないけれども、名告るは惜しい名であつた。神月はいひ淀み、

「玉月、」とばかり言葉が濁る、

と聞免さず、

「玉玉 玉何だ、」と

疊みかけて尋問する。

「玉月、あ、秋太郎です。」といつたが我にも

あらず狼狽たのである。

「家は、」

「下宿して、」

「何處だ、何といふか、うむ、疾く言はんか。」

と急ぎ立てられて、トむねをついて猶豫つて、惡いことをしたと思つた。

横顔を一拳、拉げよと撲りつけて、威丈高になつ

て、

「來い、」

蒲柳の公子は生れて以來、恚ばかりの恥辱を與へられたことを嘗て覺えぬ。夜目にこそ見えね色を作して、

「君！」

「馬鹿いへ、君たあ何かい」といひざまに横撲

に拂く手を、緊乎と取つたが聲も蠶へて、

「名を言はう。」

「何い。」

「神月梓といふんだよ。」といひながら手を向うへ押遣つたが、吻と息を吐いて俯向いた。學士は此處で名乗つた名が太くも汚れたやうに感じたのである。

警官はこれを聞くと、其の偽名を語つた所以を詰らうともせず、忽ち聲を和けて、

「神月かね、」

「用があるんですか。」と、憤はまだ消えず冷かに答へた。

「左様か、何にしても交番まで、」といつて、
巡査は其の仔細を語つた。

丁度今しがた、根津の交番で、太く取亂した女が一人掴つたが、神月といふ人を尋ねるのだとばかりで、取留のないことを言つて居る。最初其女が路を歩いて居る時背後から一人跟けて來た男があつた、といふことを通行人が告げたので、女は身装の可い上に、容色が抜群であるから、掏摸か、何ぞ惡意あつて尾行したものであらうといふ鑑定で、女を取調

ある。
べる旁々其の惡漢の手當に巡行を命ぜられたもので

語りかけて巡查は嘲けるが如く梓を見み《一て、
「ふむ、色狂氣の亭主だな。」

然矣、
 色狂氣の亭主
 を警官の口から聞くに至つて梓は絶望したのである。

然れば冥土を辿るやうな思ひで、彌生町を過ぎて
 根津まで行くと、夜更で人立はなかつたが、交番の
 中に、蝶吉は、腕を背へ捻られたまゝ、水を張つた
 手桶に其の横顔を押しつけて、ひい／＼泣いて居
 た。

帯は解いて下じめと共に卓子の上に束ねてあつた。
 爾時まで嗜んで持つて居たか、懐中鏡やら鼈甲に透
 彫の金蒔繪の挿櫛やら、邊に散ばつた懐紙の中には、
 見覺のある綴縷錦の紙入も、落交つて狼籍極まる、
 蝶吉は恰も手籠にされたものゝ如く、三人懸りで身
 動きもさせない様子で、一人は柄杓を取つて天窓か
 ら水を浴びせてをつた。黒髪も梅松となり、胸も裾
 も取亂して乳も露になつて震へて居る。

梓は齒切をして、衝と寄つて、其の行爲を詰つたが、これに答へた警官の語は、極めて明瞭に、且つ極めて正當なものであつた。

狂人力で手に合はず、取静めようとして引留めれば、主のある身體だ、指を指すなど、あばれ廻つて、簪を抜いて突かうとする。突かれて手の甲に傷けられたものも一名ある、漸々掴まへてからも危険だから、腕は捻ぢ上げて置かねばならぬ。且つ其の住所、姓名、自分の手懸を知るために、懷中物も検べねばならず、或は如何なる迫害を途上受けたかも計られないから、身内を検するには、着物も脱がさなければならぬ、勿論帯も解かんければ不可い。逆上て夥多しく鼻血を出すから、手當をして、今冷して居る處だといつた。學士が此處に來た時には、既に其の道を行く女に尾行した男といふのが明かに分つて居た。

交番の窓に頬杖を置いて、様子を見て居る一名紋着を着た目の鋭いのが即ち其で、渠は學士に怨のある書生の身の果で、今は府下の或小新聞に探訪員た

る紳士であつた。

「やあ、神月。」

これにも答へず、固より警官には返すべき言もなく、學士は見る目も可憐さに死んだものゝやうになつて居る蝶吉を横ざまに膝に抱上げた。

「神月だ。」

思はず骨も砕くるばかり、緊乎と縋つて離れぬのを、賺かして、帶をしめさせて、胸を接合せてやつて、落散つた駒下駄を穿かせて、手を引いて交番を出ようとする時、

「そら忘物だ、」といつて投出して呉れたのは、年紀二十の自分の寫眞、大學の制服で、折革鞆を脇挟んだのを受取つて、角燈の灯の届かぬ、暗がりの中に消えてしまつた。が、深更の大路に車の輾る音が起つて、都の一端をりん／＼として馳せ行く響、やました山下を抜けて廣徳寺前へかゝる時、合乗の泥除に其の黒髪を敷ばかり、蝶吉は身を横に、顔を仰向けにした上へ、梓は頬を重ねて居た。其時は二人抱合つ

て居たが、死骸は大川で別々。

男は顔を両手で隠して固く放さず、女は両手を下で鳩尾に巻きしめて居た。

此死骸を葬る時、疾風一陣土砂を捲いて、天暗く、都の半面が暗くなつて、瀧の如き驟雨が注いだ。柩は白日暗中を通つたが、寺に着く頃には、拭ふが如き蒼空となつた。

墓は、神月梓、松山峰子、と二ツならべて谷中の瑞林寺にある。

甲ふものは、梓が生前の三個の信友と、いま一人、忍々に音信るゝ玉司子爵夫人龍子であるが、姫は一夜、墓前に於て、ゆくりなく三人の學士にあつた時、哀を請ふものゝ如く、其の自分がこゝに詣づること、固く秘密を守つて世にあらはれぬやう、名にかけて誓はれたいといつて跪いたのである。哲學者は直ちに靈前に合掌して之を誓ひ、柳澤は卵塔の背後に肅然として頷いたが、一人龍田は、柳澤の胸に其の紅顔を押當てゝ落涙しつゝ頭を掉つた。星は其時煌煌一きらめ一いたであらう。如何に、紫か、緑

か、
燦然^{さんぜん}として。

【完】